

## 研究ノート

### 栗原玉葉に関する基礎研究

田所 泰

#### はじめに

大正期、京都の上村松園（一八七五―一九四九）、東京の池田蕉園（一八八六―一九一七）、大阪の島成園（一八九二―一九七〇）を筆頭に、女性日本画家の活躍が目立ちはじめた。京都では上村松園が、明治四十年（一九〇七）に開設された文部省美術展覧会（以下文展）の第一回展から入選・受賞を繰り返し、大正五年（一九一六）には無鑑査となる。同年には伊藤小坡（一八七七―一九六八）が、さらに大正七年には和気春光（一八八九―？）が文展初入選を果たし、はじめ国画創作協会へ出品した梶原緋佐子（一八九六―一九八八）も、大正九年以降官展での入選を重ねた。一方大阪では、大正元年に島成園が文展初入選を果たし、大正四年には吉岡（木谷）千種（一八九五―一九四七）が、やや遅れて大正十四年には生田花朝（一八八九―一九七八）が官展へ入選、それぞれ出品を繰り返し返している。また大正五年には、成園、千種、岡本（星野）更園（一八九五―？）、松本華羊（一八九三―？）の四人が、四人の会として展覧会を開催、さらに千種は女性を対象とした画塾・八千草会を自宅にて開き、後進の指導にも努めた。

これらに対し東京では、明治四十年の第一回文展に池田蕉園、河崎蘭香（一八八二―一九一八）、椎塚蕉華（一八八四―一九三四）の三人が入選、蕉園においては第三回展への入選を最後に官展への出品は見られなくなるが、蕉園は毎回入選、蘭香もほぼ毎回入選を果たしている。その一方で、明治四十一年には歌川若菜、兼重暗香（一八七二―一九四六）、松林雪貞（一八八〇―一九七〇）が、四十二年には石川玉溪（精華、丹麗）が、四十三年には大久保（高木）鏡湖が、大正元年には奥原晴翠

（一八五二―一九二二）がそれぞれ入選を果たしているものの、いずれもその一回のみであり、明治四十二年に入選した石川蕉玉と上原桃畝（一八八二―一九四七）も、蕉玉が二回、桃畝が大正八年と昭和二年（一九二七）との計三回と、継続的に入選を重ねた画家は必ずしも多くない。そんななか、大正二年に《さすらひ》で文展初入選を果たし、蕉園、蘭香のほか唯一継続して官展への入選を繰り返していたのが、日本画家・栗原玉葉（一八八三―一九二二）である。

長崎出身の玉葉は、女学校卒業後に上京し、私立女子美術学校（現女子美術大学）で学んだ。また寺崎広業（一八六六―一九一九）に師事し、その没後には松岡映丘（一八八一―一九三八）の門へと移っている。大正六年に池田蕉園が、翌大正七年に河崎蘭香が相次いで亡くなった後には、「東京に於ける閩秀畫壇の第一人」と称され、<sup>(1)</sup>「京都の松園女史に對し東京の栗原玉葉女史を擧げる人がある」などと、しばしば京都の上村松園とも対比された。幼い少女や女性の姿を題材に多くの作品を制作しており、伊東深水（一八九八―一九七二）は後年、いわゆる「美人画」というジャンルの発生に寄与した画家として、上村松園や鏑木清方（一八七八―一九七二）等の名前とともに、玉葉の名前を挙げて<sup>(2)</sup>いる。また、銀葉会と称した弟子の数は、八十名とも一〇〇名ともいわれ、<sup>(4)</sup>大正九年には他の女性画家等とともに日本画の研究団体・月耀会を組織している。

女性画家に関する研究は現在、個々の作家研究はもちろん、ジェンダーや社会システムといった視点からの研究や、画塾や美術学校、研究所といった女性が絵を学ぶための教育機関やそこでの学習内容、また官展や在野団体、さらに女性画家による団体等といった制度面からの研究など、多方面から進められている。<sup>(5)</sup>このうち女性画家による団体の研究では、朱葉会や女艸会、七彩会といった洋画家団体や、月耀会、翠紅会といった日本画家団体など、大正期以降に組織された団体の存在が明らかにされ、「女性美術家個々のつながりを深める役割を果たした」という指摘もなされている。<sup>(6)</sup>しかし、女性日本画家による団体に限って言えば、上村松園や野口小蕨（一八四七―一九一七）など、作家研究の盛んに行われている画家がこうした団体活動にはかかわっておらず、また朱葉会のように戦後も続けられた団体がなかったこともあってか、その具体的な活動や女性日本画家同士のネットワークに関する

る研究は、現在まであまり進められていない。

栗原玉葉は女性による初の日本画家団体である月耀会の中心的なメンバーであり、広い交友関係を有していた。本稿もまた、一作家研究の域を出るものではないものの、これまで見過ごされてきた画家たちの活動に光をあけるとともに、画壇における女性画家たちのネットワークをより具体的に解明する足掛かりにもなると考えている。

こうした視座を念頭に置きつつ、本稿では栗原玉葉に関する基礎研究として、その生涯について記してみたい。

### 栗原玉葉の生涯について

玉葉の伝記については、生前すでに、新聞記者・金井紫雲（一八八八—一九五四）による「栗原玉葉女史」が『婦人世界』第十六卷第八号（大正十年八月）に掲載され、没してすぐの『新人』第二十三卷第十号（大正十一年十月）には、有富虎之助による「栗原綾子略歴」が、その翌月の『婦人世界』第十七卷第十一号（大正十一年十一月）には、玉葉が生前姉妹のように親しくしていた院展系の日本画家・鈴木（原）けん子（一八八七—？）による「逝きし栗原玉葉女史の面影」が掲載されるなど、早くから大まかな内容については知られていた。その後、昭和十一年（一九三六）八月に刊行された『長崎談叢』第十八輯に、玉葉と親交のあった長崎の郷土史家・林源吉（一八八三—一九六三）による「三畫人追想」が掲載されたほか、玉葉が育った山田村の村史である『山田村史』（昭和二十九年三月）や、合併後の『吾妻町史』（昭和五十八年十一月）などにもその伝記が紹介されている。<sup>(7)</sup>しかしながら、これらはいずれも概略的な記述のみで、その内容も先行する資料からの踏襲が多く、展覧会出品記録等についても充分には明らかにされていない。本稿ではこれらの資料や先行研究を基礎とし、さらに他の文献資料等を参考にしながら、玉葉の生涯について記していく。

#### (一)

栗原玉葉は明治十六年（一八八三）四月十九日、長崎県南高来郡山田村（現長崎

県雲仙市吾妻町）において酒造業を営んでいた栗原宰<sup>(つかさ)</sup>、クマ夫婦のもとに、五人兄妹の末っ子として生まれた。<sup>(8)</sup>本名あや（綾・文）。父の宰は多芸多趣味の人として知られ、家には文人墨客が絶えず訪れていたという。また、母のクマは江戸時代、島原街道の山田本陣を務めた庄屋・林田家の出身で、手芸にすぐれ、短歌もよくしたといわれている。四人の兄は長男から順に、破魔寿、貞男、源治、吉郎といい、三男・源治は後に広島高等師範学校の図画手工の教師となっている。栗原家は二五〇年も続いた旧家であり、先祖は江戸時代初期の美濃大垣城主栗原加賀守正治にたどることができるとされているが、玉葉の時代にはその勢いも衰え、暮らし向きも決してよくはなかったという。現在、栗原家があった栗林名二五六の地には、玉葉とその兄・源治の名が刻まれた碑が建てられている。

こうした家庭に生まれた玉葉は、幼い頃から絵を描くことを好み、手当たり次第にいろいろな「樂書き」<sup>(9)</sup>をして楽しんでいったという。また、母親同様に短歌をたしなみ、『新人』第二十三卷第十号（大正十一年十月）には、玉葉作の短歌十二首が収められている。

明治二十八年、数えて十三歳の年に玉葉は長崎の兄のもとから師範の附属へ通いはじめ、卒業後は長崎市内の弁護士宅に住み込み、小間使いとして働いた。この弁護士と親交のあった梅香崎女学校（現梅光学院）の副校長、ミス・サラ・M・カウチ（一八六七—一九四六）は、弁護士宅で玉葉と知り合い、その人物と才能を見込んで梅香崎女学校への入学を勧め、明治三十四年、玉葉は当時長崎市内にあった同校へ入学した。栗原家の宗教はもともと神道であったが、梅香崎女学校がミッシェンスクールであったことから、玉葉は入学後まもなく、梅香崎教会の牧師・瀬川浅（二八五三—一九二六）より受洗し、クリスチャンとなる。英語の成績がよく、教師たちからは英文学を研究するよう勧められたという。その一方で、在学中、商工奨励館において開催された長崎美術展覧会へ『櫻』を出品、林源吉や明治三十七年四月より同校図画科の教師を務めていた日本画家・大久保玉珉（一八七四—一九四七）等の目に留まり、画道へ進むよう奨励された。ミス・カウチや梅香崎女学校校長・広津藤吉（一八七一—一九六〇）等の支援もあり、玉葉は明治三十九年三月三十日に同校を卒業すると、<sup>(10)</sup>単身上京、当時本郷弓町にあった私立女子美術学校

(以下女子美術学校)の寄宿舎に入り、九月より予科へ通った。<sup>(11)</sup>玉葉は後年、「女學校を卒業する前までは、一生繪を描いて送らうとも思ひませんでした。ただ好きなことですから習ひたいと思つてをりました。女學校を卒業して、女子美術學校に入學して本當に繪を習ひはじめてからは、この長い一生を繪を描いて暮すことができた、どんなに嬉しいことだらうと思つてをりました」と語っている。

女子美術学校の寄宿舎では、同年四月に入學していた愛知県出身の鈴木けん子と同室になった。けん子はのちに、はじめて玉葉と出会った頃のことを次のように回想している。<sup>(13)</sup>

出京後初めての夏休みを終へて愴惶女子美術學校の宿舎に歸つた私は、同室に才華爛發の新らしき友を見た。互に田舎物の物なれず沈黙しつゝ、しかも注目しつゝ過ぐる間に語り合ふに至り親しさを加へ、學校を卒へた後も眞砂町林町と共に住む、研究をしつゝけた親子兄弟としても此久しきに渡る理解ある生活は許され難き、縁故深さをあらためて追憶せずには居られぬ。

明治四十年四月、玉葉は女子美術學校高等科へ入學、川端玉章(一八四二—一九二三)の弟子で、鑑画会などで活躍した日本画家・端館紫川(一八五五—一九二二)に学んだ。その翌月には同校教師の紹介により、当時神田白壁町(現千代田区鍛冶町)に居を構えていた日本画家・寺崎広業の門に入り、研究会等へ出席したといふが、<sup>(15)</sup>学校の課業などが忙しく、実際に指導を受けるようになったのは主として同校卒業後のことであつたといふ。<sup>(16)</sup>また、在学中には文展が開設され、学校の授業を休んで内緒で見に行ったところ、運悪く学校の先生に遭遇してしまふといつたこともあつたといふ。<sup>(17)</sup>

十二月八日、玉葉は女子美術學校のすぐとなりにあつた本郷教会(現弓町本郷教会)へ転入、同じ日には鈴木けん子と、おなじく女子美術學校日本画科の中村ますが、同教会にて洗礼を受けている。<sup>(18)</sup>本郷教会は熊本洋学校、および同志社英学校(現同志社大学)に学び、キリスト教伝道に尽力した牧師・海老名弾正(一八五六—一九三七)が、明治十九年に湯島にて開いた講義所「博愛館」にはじまるプロテスタント教会で、

玉葉は熱心に教会へと通うかたわら、日曜學校の教師を務め、幼稚科を受け持った。また、ライオン株式会社の創業者であり、本郷教会の会員でもあつた小林富次郎(一八五二—一九一〇)が、従業員の教育を目的として、明治三十四年に当時の小石川工場内に開設した夜學校においても玉葉は教鞭を執り、十歳前後の幼い女子従業員等に読書や算術を教えていたといふ。「私は子供が大好きで、始終子供の繪を描きます」と自ら述べているように、玉葉は生涯にわたり多くの少女像を制作しているが、そのことについて、玉葉と同じ頃に本郷教会の日曜學校で教師を務め、後に校長となつた鈴木衡平は、後年次のように述べている。<sup>(20)</sup>

其當時貴女は兒童の心理と表現とを専ら觀察して居られた様でありましたが果せる哉、數年ならずして貴女の畫筆精鍊せらるるに當り「天國は其内にあり」と基督の仰せられた天真なる子供を畫題として幾多の傑作を發表せられました。當時の美術界に異彩を放つた事でありました。

玉葉はまた、詳しくは後述するが、海老名が主筆を務めた本郷教会の機関誌『新人』の兄妹誌として創刊された『新女界』に、挿絵などを多数描いている。

なお、『新人』第九卷第一号(明治四十一年一月)によれば、本郷教会転入時の玉葉の住所は、「本郷弓町二ノ八杉原方」であつたといふが、その後経済的な理由もあり、同室であつた鈴木けん子とともに当時眞砂町に住んでいた渡邊という裁縫の教師宅の一間を借りて、自炊生活をはじめたといふ。

明治四十一年には、十二月に刊行された『婦人くらぶ』第一卷第三号に、玉葉の描いた口絵(挿図1)が、「栗原綾子」の名前で掲載された。これは同誌が行つていた懸賞投稿募集の当選画として載せられたもので、『おち葉』と題された同作には、腰をおろしてひと休みをする農婦の姿が描かれている。

これより少し前の十月十三日、女子美術學校は三階裁縫科の教室より出火し、校舎と寄宿舎の大半が焼失、一週間ほどで焼け跡に仮校舎が建てられ授業は平常どおり行われたが、この機に新校舎を本郷菊坂町に建設することが決まつた。<sup>(21)</sup>明けて明治四十二年四月一日、ほぼ完成した菊坂町の新校舎にて、卒業式が行われた。卒業

生は一八四名。玉葉は高等科卒業生総代として、普通科卒業生総代の牟田操子とともに謝辞を朗読している。<sup>(22)</sup>卒業後、玉葉は郷里の母を迎え同居をはじめた。

## (二)

女子美術学校卒業からわずか二ヶ月後の明治四十二年(一九〇九)六月、玉葉は師である広業が主な指導役を務めていた美術研精会の第七回展へ、「栗原綾子」の名前で一尺五寸に四尺の《初夏》<sup>(23)</sup>(絹本、八円)を出品、翌明治四十三年四月一日より三十日まで、上野公園・竹之台陳列館にて開催された同会の創立十周年記念大展覧会にも、一尺八寸幅の《山水》<sup>(24)</sup>(絹本、十五円)を「栗原綾子」の名前で出品している。

これより先、ちょうど玉葉が女子美術学校を卒業した日に、本郷教会の牧師・海老名弾正が主筆を務める『新人』の兄妹誌として、『新女界』が創刊された。誌面には挿絵が一号に数点ずつ入れられており、玉葉をはじめ、洋画家の有田四郎(一八八五―一九四六)や佐藤孝任、鈴木けん子らが筆を執っている。明治四十三年七月に刊行された『新女界』第二巻第七号には、小さな虫かごを覗き込むようにして座る少女を描いた「すゝ虫」(挿図2)と、大きな下駄をつっかけ、如雨露を手に鉢植えの双葉に水やりをする「あたしの」の二点が掲載されており、どちらの挿絵にも題字の下に、「綾」の字を丸で囲んだサインが入られている。目次の記載か

挿図1 「懸賞繪畫當撰 おち葉」、『婦人くらぶ』第1巻第3号(明治41年12月)より

ら玉葉の筆になることが確かな他の挿絵には、「あや」「玉」「葉」などの字を丸で囲んだサインが見られ、これら二点の挿絵に関しても、おなじく玉葉の描いたものであると考えられる。これ以降、大正八年(一九一九)二月に同誌が廃刊となるまでに、玉葉は表紙絵一点、口絵二点を含め、合計二〇〇点ほどを描いている。題材は振袖姿の少女や丸髻の婦人、年配の女性や農村で働く女性、はたまた古代風俗の女性像など多岐にわたるが、その大部分を占めるのは十歳前後の幼い少女像となっている。

## (三)

明治四十四年(一九一一)二月、上野公園の竹之台陳列館で開催された第十一回異画会展(二十日―三月二十日)<sup>(25)</sup>へ、玉葉は「栗原玉葉」の名で《幼き日》と題した対幅の作品(挿図3)を出品した。<sup>(26)</sup>同作には柱を背にして地面に座り込んだ少女と、エプロンをつけて傘を持ち、ポーズを決めるような仕種をする少女が描かれ、審査において三等銅賞を受賞、<sup>(27)</sup>さらに宮内省御用品となった。<sup>(28)</sup>

翌三月には、二十日より六月十日まで、上野不忍池畔勸業協会にて開催された東

挿図2 『新女界』第2巻第7号(明治43年7月)掲載の挿絵

京勸業展覧会へ《観音詣》を出品<sup>(29)</sup>、さらに二十一日より四月十九日まで、竹之台陳列館にて開催された第九回美術研精会展へは、《夏の夕》と題した作品を出品して<sup>(32)</sup>いる。後者は絹本一尺四寸幅の作品で、売価は十六円、<sup>(33)</sup>「鮮やかな物だ美人畫中最も傑出してゐる」と評され、審査の結果四等賞を受賞した。<sup>(35)</sup>

四月には一日より七日まで、市ヶ谷の女子商業学校にて開催された第二回国香会展へ、《野の花》と《花の影》を出品して<sup>(36)</sup>いる。

なお、『新女界』第二巻第七号の挿絵では、いまだ「綾」というサインを使用していたのに対し、第十一回巽画会展へ出品する際には「栗原玉葉」と名乗っていることから、あやが玉葉と号すようになったのは、明治四十三年七月から翌四十四年二月までの間のことであつたと考えられるだろう。

挿図3 《幼き日》明治44年

(四)

明治四十五年(一九一三)には、四月三日より二十九日まで、上野公園の竹之台陳列館にて開かれた第十二回巽画会展へ《鈴虫》(挿図4)を出品<sup>(38)</sup>。同作は江戸時代初期の女性三人により構成された二曲一双の屏風で、左隻の少女が虫籠と手紙の結びつけられたススキを、右隻の女性へ差し出すさまが描かれている。同作は審査において、三等銅賞を受賞した。<sup>(39)</sup>

挿図4 《鈴虫》明治45年

(五)

大正二年(一九一三)二月、玉葉は三越呉服店が行った第二回懸賞広告画募集において、第二等第二席に当選する<sup>(40)</sup>。この懸賞広告画募集は、明治四十四年に三越呉服店が賞金一五〇〇円を懸けて募集し、有名な橋口五葉(一八八一—一九二二)の作品が当選した懸賞募集の第二回目で、一等賞金は一〇〇〇円、応募総数は三八一点に上った。一等当選者は洋画家・平岡権八朗(一八八三—一九四三)、二等第一席には当時京都にいた日本画家・吉田秋光(一八八七—一九四六)が選ばれている。玉葉ら当選者は二月二十七日に三越呉服店竹の間において午餐を饗応され、当選画を含めた佳作八十点が、三月二十日より三越呉服店内において一般に公開された<sup>(43)</sup>。玉葉の作品は江戸時代中期の女性が鏡の前でやや年配の女性に打掛を着せてもらっているところを描いたもの(挿図5)で、自ら次のように説明している<sup>(44)</sup>。

祐信あたりの時代の美人を畫いて見ようと思つたのでございます。併し如何しても顔は近代風になつてしまふので困つて居ります(中略)圖柄は高貴の姫君が外出なさるのでお召換をなさるといふつもりなのでございますが、あまり派手に出来たので、宅の者はお嫁入の様だなどと申しますの。

なお、『三越』第三卷第三号(大正二年三月)によれば、玉葉はこの頃、小石川区白山御殿町二十六番地に住していたという。

挿図5 三越呉服店第二回懸賞広告画募集における玉葉の当選画

三月には二十五日より四月七日まで、上野公園・竹之台陳列館にて開催された第十三回異画会展<sup>(45)</sup>へ、木蓮の下で人形を抱え石段を登ろうとする幼い少女を描いた《春の日》(挿図6)を出品、褒状一等を受賞する<sup>(46)</sup>。さらに翌月の第十二回美術研精会展<sup>(47)</sup>には、三尺の《蝶のゆくゑ》(二十円)を出品している<sup>(48)</sup>。

五月、女性向け雑誌の『婦女界』第七卷第五号に、『衣がへ』と題された玉葉の口絵が掲載された(挿図7)。同作には衣替えの最中と思しき江戸時代中期の婦人が、薄緑色の振袖を手に取り広げているさまが描かれている。この口絵を皮切りに、玉葉は亡くなる大正十一年(一九二二)までにたくさんの口絵を描いており、現在確認できているだけでもその数は十五誌、約九十点に上る(表1)。描かれているの

挿図7 『婦女界』第7卷第5号(大正2年5月)  
口絵《衣がへ》

挿図6 《春の日》大正2年

はほとんどが女性像だが、少女の他に婦人像も多く、一部草花などを描いたものも認められる。また、雛祭りや朝顔など、季節感のある題材が多く取り上げられている。

六月には大阪の日本精版印刷合資会社が、「繪看板の革新發達を期する爲め」、総額一〇〇〇円の賞金を懸けて行った広告画募集において、四等三席となった。<sup>(49)</sup>このときの応募総数は三二四点で、一等にはポスター制作に積極的に取り組んだ大阪の日本画家・北野恒富（一八八〇—一九四七）が当選、玉葉よりひとつ上席の四等二席には、島成園が当選している。頭に大きなリボン結び、振袖を着て左手の指に指輪をつけた娘と、まだ幼い少女がともに寄り添いソファのようなものに腰掛けたまを描いた玉葉の作品（挿図8）は、七月十日より二十日まで、他の応募作品とともに宝塚パラダイス別館において一般に公開された。<sup>(51)</sup>

翌七月、師である寺崎広業の郷里・秋田の秋田市公会堂にて、広業門下生等の作品を同地に紹介するという目的のもと、天籟画塾絵画展覧会が開催された。<sup>(52)</sup>玉葉は《芽柳》（十五円）、《ダリヤ花》（十五円）、《桃ノ節句》（三十五円）の三点を出品している。<sup>(53)</sup>

十月には第七回文展に、三味線を膝にのせて石の壇に座る貧しい身なりの少女を描いた《さすらひ》（挿図9）を出品、初入選を果たし、作品は売約済となった。<sup>(54)</sup>売価は八十円。<sup>(56)</sup>この作品について、玉葉はその制作のようすを次のように語っている。<sup>(56)</sup>

挿図8 日本精版印刷合資会社の広告画募集における玉葉の当選画

昨年の秋、文部省の美術展覧會に當選いたしました時などは、夢ではないかと思つたくらゐでした。あの『さすらひ』を書きます時は、淺草の仁王門を背景にしましたので、でき上るまで毎日淺草へ通ひました。御承知の通り、あんなに人通りの多いところですから、人眼につかないやうにと思ひましても、何時か私の周圍に見物人が澤山集まりまして、折角興がのつてゐるところへ、高い聲で話をされたり、面白半分にいるいろいろ批評がましいことをいひ囃されたりいたしますので、途中で止してしまはうかと思つたことは何度あるか知れませんでした。

また、その内容について、後年次のように説明している。<sup>(57)</sup>

初めて文展へ入選したのは、「さすらひ」と言ふ女乞食を描いたものです。畫題を得ますには、非常な苦心をしますが、妾には現實的な寫生物は何うも描け

挿図9 《さすらひ》大正2年

## 『風俗畫報』東陽堂

刊行年月	巻号	作品名
大正4年6月	470	雨の日

## 『令女界』寶文館

刊行年月	巻号	作品名
大正11年4月	1-1	春のある日
大正11年7月	1-4	夏の朝

## 『婦人雑誌』婦人評論社

刊行年月	巻号	作品名
大正4年11月	4-5	祝歌

## 『淑女畫報』博文館

刊行年月	巻号	作品名
大正4年11月	4-12	暮行く秋
大正7年12月	8-1	わかき春
大正8年9月	8-10	お三輪
大正9年3月	9-4	らんまん
大正11年6月	11-7	待宵草

## 『新女界』新人社

刊行年月	巻号	作品名
大正5年1月	8-1	ゑがほ
大正6年1月	9-1	クリスマスの鐘の音

## 『婦人之友』婦人之友社

刊行年月	巻号	作品名
大正6年2月	11-2	時勢装スケッチ
大正8年4月	13-4	春の光

## 『婦人界』東京社

刊行年月	巻号	作品名
大正6年12月	6-12	暮の巷
大正7年9月	7-9	虫のね
大正8年9月	8-9	すゝき
大正9年11月	9-11	櫛紅葉
大正10年10月	10-10	人物
大正11年1月	11-1	若き
大正11年8月	11-8	ゆうべ

## 『主婦之友』東京家政研究會

刊行年月	巻号	作品名
大正6年3月	1-1	うれしき日
大正6年4月	1-2	春の歌
大正10年5月	5-5	チュウリップ



表1 雑誌掲載口絵一覧（未定稿）

※作品名は一部を除き、目次に記されたものを記載した。

『婦人くらぶ』紫明社

刊行年月	巻号	作品名
明治41年12月	1-3	おち葉

『婦女界』婦女界社

刊行年月	巻号	作品名
大正2年5月	7-5	衣がへ
大正3年10月	10-4	秋ばれ
大正3年11月	10-5	色紙短冊
大正4年5月	11-5	いこひ
大正4年12月	12-6	木枯の夜
大正5年8月	14-2	お月さま
大正7年2月	17-2	さゝなき
大正7年9月	18-3	野の花
大正8年3月	19-3	のどか
大正8年11月	20-5	霜月はじめ
大正9年5月	21-5	青葉のかげ
大正9年10月	22-4	秋の上野
大正10年11月	24-5	髪をすく人
大正11年4月	25-4	日誌

『婦人世界』實業之日本社

刊行年月	巻号	作品名
大正3年3月	9-3	雛祭の日
大正3年10月	9-11	吉野の静
大正4年1月	10-1	初音
大正5年3月	11-3	花咲く里より
大正7年3月	13-3	初節句
大正8年4月	14-5	惜しき春
大正9年4月	15-4	落花流水
大正9年10月	15-10	朝
大正10年6月	16-6	初夏の朝
大正11年3月	17-3	花咲く頃

『婦人畫報』東京社

刊行年月	巻号	作品名
大正3年6月	96	祭の日
大正3年12月	103	日誌のをはり
大正4年7月	110	朝顔
大正4年12月	117	山茶花
大正5年9月	126	白芙蓉
大正6年11月	140	しぐれ
大正7年5月	146	新緑
大正7年11月	153	野菊

大正8年5月	159	とき色の花
大正9年1月	167	餘興
大正10年2月	181	白梅
大正10年12月	192	つばき
大正11年4月	196	かげろふ

『女學世界』博文館

刊行年月	巻号	作品名
大正3年8月	14-10	月待つ人
大正3年9月	14-11	蟲の音
大正3年10月	14-12	落葉
大正4年8月	15-9	初秋
大正5年1月	16-2	鳥の聲
大正5年3月	16-4	花吹雪
大正5年4月	16-5	牡丹
大正5年5月	16-7	ほたる
大正5年11月	16-13	この一ととせ
大正5年12月	17-1	春あそび
大正6年1月	17-2	さゝなき
大正6年2月	17-3	まらうど
大正6年4月	17-5	五月ばれ
大正6年9月	17-10	紫苑
大正7年7月	18-7	待宵草

『少女畫報』東京社

刊行年月	巻号	作品名
大正3年11月	3-13	逝く秋の歌
大正4年4月	4-4	小鳥歌ふ春
大正4年10月	4-10	秋のかたみに
大正5年3月	5-3	のどか
大正8年3月	8-3	日向
大正9年8月	9-8	朝顔

『少女』時事新報社

刊行年月	巻号	作品名
大正4年1月	25	お父様の代理
大正4年11月	35	御大禮の宵
大正5年12月	48	むろざき
大正6年4月	52	散りゆく花
大正6年10月	58	野菊
大正7年2月	63	かげろふ
大正7年8月	69	初秋の風
大正7年12月	73	福壽草
大正8年12月	85	清香

ません。讀んだ書物に現はれました人物を興趣の趨くまゝに、描き上げる方で「<sup>(58)</sup>やすらひ」も其頃の妾の心の漂泊を人物化したやうなものです。

挿図10 《幼などち》大正3年

この《<sup>(58)</sup>やすらひ》が出世作となり、玉葉は以降、官展での入選を重ねた。十一月、玉葉の母校である長崎の梅香崎女学校および東山学院が大正元年十月に創立二十五周年を迎え、明治天皇崩御のため延期されていた記念祝賀会が行われた。期間中、十二、十三日の両日には、梅香崎女学校と東山学院において成績品展覧会が開かれ、梅香崎女学校では大久保玉珉らの作品とともに、玉葉の初期作品《<sup>(59)</sup>ふりゆくもの》その他が展観された。

また、同月二十三日より三十日まで、神田今川橋話の青雲堂にて開かれた第四回国香会展へ、玉葉は《<sup>(58)</sup>錦絵の女》《<sup>(59)</sup>月前》《<sup>(60)</sup>誘睡》を出品している。

大正三年（一九一四）に入ると、玉葉は三月に開かれる東京大正博覧会へ向けて作品制作に取り掛かった。<sup>(60)</sup>

（六）

題はまだ考へませんが、門のところに子供が三人立つてゐるところで、年頃は三人とも違つた方がいいだらうと存じまして、皆んな違つた子供にいたしました。

春ではございますし、無邪氣な子供を書くのですから、なるだけ陽氣な可愛らしいものを書きたいと存じてをります。

そうして出来上がった作品は《<sup>(61)</sup>お約束》（図版1—(a)）と題され、三月二十日より開催された東京大正博覧会へ出品された。売価は二〇〇円。同作には門口の前で指切りをするふたりの少女と、そのふたりよりやや若い少女の三人が描かれている。

この年の四月頃、玉葉は長崎へ帰郷していたらしく、長崎の県立長崎図書館には、「<sup>(62)</sup>長崎愛野 3 4・28」の消印をもつ、島原鉄道の社長であった植木元太郎（一八五七—一九四三）宛の書簡が収蔵されている。同書簡には植木にお世話になった御礼と、病氣のお見舞い、また二、三日のうちに東京へ戻る予定であることなどが記されている。

十月に開催された第八回文展には、先の《<sup>(61)</sup>お約束》と同じく三人の少女で構成された《<sup>(63)</sup>幼などち》（挿図10）を出品、合わせて出品した《<sup>(64)</sup>噂のぬし》（図版1—(b)）とともに入選し、前者は褒状となった。《<sup>(63)</sup>幼などち》は縦横六尺の画面に、壊れた人形を前に顔を覆つてむせび泣く少女と、それをやや遠巻きにして佇む少女ふたりを描いた作品で、玉葉は次のように語っている。<sup>(63)</sup>

子供の繪はあの無邪氣さと、そして何處かに我儘な處があるのが、妾は好きであつて「<sup>(65)</sup>幼どち」も自分の小さい時の追懐からそれを繪にしたのに過ぎないのです、妾は我儘に育てられた女ですから今でも我儘で、その繪にもその我儘が現はれて居ると被仰る人もあります、そんな事は妾には判りませんが自分が我

儘だと言ふことは自覺して居ります。

なお、「立つてある子の着物は、クリーム色の大辨慶とコバルトの地に薄墨色の牡丹の花を出したのと、も一人の子は濃海老茶がとつたこまかい模様物」<sup>(64)</sup>であったという。

一方の《噂のぬし》では、「常磐津 三都勢」と書かれた大きな提灯のさげられた門口で、室内のようすを窺うようにしてじっと立ちつくす少女が描かれている。三和土にはすでにいくつもの履物が並び、わずかに見える障子の蔭には女性の後ろ姿が見えている。

《幼なじち》<sup>(65)</sup>は東京での文展初日に、《噂のぬし》<sup>(66)</sup>は京都での初日に、それぞれ売約済みとなった。<sup>(67)</sup>

十二月には、七日より三十一日まで、京橋東仲通柳町にあった美術商・松井画博堂にて開催された春懸新作展覧会へ作品を出品<sup>(68)</sup>、また同月十三日には本郷のきく本にて、春以来の作品六十点余りを陳列し、かねてより約束をしていた人々へ配布した<sup>(69)</sup>という。

#### (七)

大正四年(一九一五)に入つてすぐの一月二十八日、年末から体調を崩していたという玉葉の母・クマが、七十三歳で亡くなった。<sup>(70)</sup>林源吉によれば、クマは臨終に際し、もう一度故郷に帰つて先祖の墓参りがしたいと言ひ遺したといひ、玉葉は同年四月に帰郷、林らの招待に応じ、東小島の辰巳にて、満開の庭園の桜花を眺めながら席面を楽しんだという。玉葉はクマが亡くなってから三ヶ月ほどのちに刊行された『婦女界』第十一巻第五号(大正四年五月)において、母について次のように語っている。<sup>(71)</sup>

餘りの悲しみの果て好きな繪を描くことは素より物を思ふことさへも出来ぬま  
でに、私の心は悲しみに満されました(中略)しかし「悲しみの底に喜びがある」  
と申すやうに、悲哀の中に三月餘りを送つた此の頃漸く光明を見出して、新し

い希望を持つことが出来るやうになつて來ました(中略)私が更に新しい努力を以て繪畫を修業したならば、亡くなつた母もどんなにかそれを喜んで呉れるであらうと思つてをります。今まで母によつて得てゐた慰めと、勵ましと、喜びと、望みとを、私は今後繪によつて得ようと覺悟したのでございます。

母親の死後、玉葉はそれまで住んでいた場所からほど近い、白山御殿町一〇番地へ転居した。<sup>(72)</sup>

二月、玉葉は京橋尾張町の銀座美術館において、六日より二十一日まで開催された日本画の小品展覧会へ作品を出品している。<sup>(73)</sup>

同月二十日には、アメリカ・カリフォルニア州にてサンフランシスコ万国博覧会が開会、玉葉の作品も出品された。<sup>(74)</sup>これは同博覧会への官庁出品のうち、文部省が日本の「學制教育ノ現状ヲ示シタル圖表、寫眞、教科書及生徒成績品等」<sup>(75)</sup>として出品したもので、大正三年八月に女子美術学校と共立女子職業学校(現共立女子学園)二校の出品が決定、富士山を刺繍した額や乱菊模様のクッションといった女子美術学校の生徒等による制作品とともに玉葉の作品が出品され、会場内の教育経済館に陳列された。<sup>(77)</sup>このとき女子美術学校は金牌と賞状を贈られている。<sup>(78)</sup>

また、この年の春頃、玉葉は鈴木けん子とともに、千葉の市川へ桃見に訪れたという。<sup>(79)</sup>

五月には上野広小路の松坂屋において、一日より開催された第五回国会会展へ、《帯》《楽屋裏》《秋》の三点を出品<sup>(80)</sup>、「不相變一際きわ立つた豊麗繊細な色調を見せてゐる」<sup>(82)</sup>、「日本畫ではやはり栗原玉葉女史の三點に止めを刺さねばなるまい」<sup>(83)</sup>などと評されている。

六月六日、神田明神境内の開花楼にて、「現代名家の作品を頒つ畫會」が美術正論社の主催で行われ、会場には他の画家等の作品とともに、玉葉の《女兒》も陳列された。<sup>(84)</sup>

同月、玉葉は母校である女子美術学校にて教鞭を執ることとなり、ひと月に一週間ずつ、日本画の人物を担当した。<sup>(85)</sup>なお、『女子美術大学八十年史』に掲載された大正六年当時の学校職員一覧には、すでに玉葉の名前は見られず、後任を務めた柿

内青葉<sup>(87)</sup>(一八九〇—一九八二)の名前が記されていることから、玉葉が同校にて教鞭を執っていたのは、長くても二年間程度のことであったと考えられる。

十月の第九回文展へは、『お鶴』と『いにし春』の二点を出品<sup>(88)</sup>、『お鶴』(挿図11)のみが入選となった。八月十九日付の『讀賣新聞』は、「文展に出しますものもあれこれと迷つてゐますからづつと押しつまつてからでないといふに變るかわかりません」という玉葉のインタビューを載せつつ、人形浄瑠璃「傾城阿波鳴門」などで知られる阿波の十郎兵衛の妻・お弓を描くだろうと報じている。翌九月十日に刊行された『繪畫清談』第三卷第九号には、制作のようすを語る玉葉の談話が掲載された<sup>(89)</sup>。

『今年』<sup>(90)</sup>はおつるといふ題で、芝居ものを描く積りです、それは帝劇で見た阿波の鳴戸で、あの可憐なおつるの顔形ち總てが私に非常な美しい印象を與へたからです、あの女優は村田カク子の妹のタケ子さんですが、繪畫書位を見て描く積りです、最う一つは慶長美人でモデルには某女優をお願ひしましたが、まだ草稿を弄つて居る位で、來月の初めから取掛る積りです

ここではお弓の娘・お鶴を制作中であること、さらにもう一点、慶長美人を描くつもりであることが語られている。

その後も新聞等で進捗状況が報じられ、搬入最終日の十月七日、『お鶴』と『い

挿図11 《お鶴》大正4年

にし春』は土砂降りの雨が降るなか搬入された<sup>(91)</sup>。

『お鶴』には「どんどろ大師」と大書された提灯を背に、首から「西國三十三ヶ所」と記された札の束を下げ、「同行二人」と書かれた笠と杖を手にした巡礼姿で歩みゆく少女が描かれている。会場ではこの年「美人画室」と呼ばれた第三室に、女子美術学校の教員であった益田玉城(一八八一—一九五五)の『かの子屋の娘』とふたつ並べて陳列された<sup>(92)</sup>。売価は一五〇円<sup>(93)</sup>。

先の談話において、玉葉は帝国劇場で見た芝居が『お鶴』を描くきっかけになったと述べているが、ここで言及されているのはおそらく、大正四年七月一日より上演された一幕物の時代世話劇「阿波の鳴門」のことだろう。このとき演じられたのは生湯稻荷鳥居先の場で、妙林と妙貞ふたりの尼とお弓が鳥居前の茶屋で話をしているところへ巡礼姿のお鶴が現れ、素性を聞いたお弓はわが子だと悟るもの、もう両親を探すのはやめて国へ帰るべきだと諭して見送るが、すぐにあとから追いかけて行くという内容で、お弓役が村田嘉久子(一八九三—一九六九)、お鶴役が村田竹子であった<sup>(94)</sup>。『演藝畫報』第二年第八号(大正四年八月)に掲載された上演時の写真(挿図12)と比べると、『お鶴』は竹子が演じたお鶴の旅装をかなり忠実に写したものであることが知られる。

一方、落選となった『いにし春』については、『婦人畫報』第一一五号(大正四

挿図12 「阿波の鳴門」よりお弓(右)とお鶴(左)、『演藝畫報』第2年第8号(大正4年8月)より

年十一月)に、「文展出品閨秀畫家の傑作」としてその写真図版(挿図13)が掲載されており、現在長崎県美術館が所蔵する《遊女の図》(挿図14)がこれに該当する作品であることが知られる。同作には桐の花が咲く下で、縄暖簾を掻き分け姿を現した女性の姿が描かれている。なお、《遊女の図》という現在の作品名は、玉葉没後の大正十五年(一九二六)に、同じく女子美術学校の出身で、広業門の妹弟子であった長山はく(一八九三—一九九五)が記した箱書による。この作品に関しては、落選となったのちに玉葉宅を訪れた雑誌記者の、「行く春」が落ちたと云ふことなそうですか、どうしたのですか」という質問に対し、玉葉は次のように答えている。<sup>(95)</sup>

何に拙づかつたからですよ、「行く春」の方がよいと云つて下さる方もありませんが、何んだか堅過ぎたので駄目だったのだそうです、何に不服なんか少しもありません、審査員の方々は妾が常に尊敬してゐる先生達ですもの落選せられたのは妾が拙かつたからだと思つてゐます

この作品は翌大正五年四月十六日より五月五日まで、上野公園の竹之台陳列館にて開催された第十六回巽画会展へ、タイトルを《桐の花》(八十円)へと変更して出品され、褒状を受賞している。<sup>(96)</sup>

(八)

大正五年(一九一六)の五月には、寺崎広業率いる天籟画塾の門弟一同による作品を集めた第一回天籟画塾展が上野公園・竹之台陳列館にて開催され、玉葉は縦四尺五寸横四尺の《宵》(絹本、三十円)(挿図15)と、縦四尺横一尺五寸の《習作》(絹本、二十円)の二点を出品した。<sup>(98)</sup>《宵》は着飾った幼い少女ふたりが行燈のともる室内で遊びに興じている図で、一方の《習作》は、「小品乍ら面白きものにて、よく女史の性格が現はれ居れり」と評されている。なお、『美術週報』第三卷第十三号(大正五年五月二十一日)等では、玉葉の出品作を「女役者」と記しているが、同展の出品目録には記載がなく、あるいは《習作》が女役者を描いたものであった可能

挿図 13 「文展出品閨秀畫家の傑作」、『婦人畫報』第115号(大正4年11月)より  
挿図 14 《遊女の図》大正4年、長崎県美術館蔵

挿図 15 《宵》大正5年

挿図16 「第十回文部省美術展覧會（舞臺の裏） 栗原玉葉氏筆」

性も考えられる。

同月、玉葉はこの年の三月に女子美術学校を卒業した教え子・笠井彦乃（一八九六―一九二〇）の広業塾入門に際し、紹介者として仲介をした。<sup>(100)</sup>彦乃は日本橋本銀町にあった紙問屋の娘で、大正ロマンを代表する画家・竹久夢二（一八八四―一九三四）の恋人としても知られる。玉葉はその後夢二とも知り合い、親交を結んだ。<sup>(101)</sup>

八月四日付の『讀賣新聞』には、早くも十月の文展出品作についての記事が掲載され、玉葉については、「下町娘の踊の稽古をかゝれるといふ事です」と伝えている。その後も新聞や雑誌で制作のようすが伝えられ、十月一日に刊行された『婦人世界』第十一卷第十一号には、出品作についての次のような言葉が掲載された。<sup>(102)</sup>

今度の文展には、踊のおさらひの樂屋を描いたものを出品するつもりで、下圖

だけは略ぼ纏まりました。これは昨年の秋、西川といふ踊の師匠のおさらひを觀て思ひついたので、樂屋の寫生をしておきました。

お染の衣裳をつけてゐる踊子を主眼にして、他に二人ばかり踊子を添へるつもりですが、困ることには衣裳方の男が一人いるといふことです。私は今まで男といふものを描いたことがございませんのに、今度は止むを得ず男を描かなければならないので、どんなものができるか心配でたまりません。

十月一日の搬入受付開始以前には、「蘭香の『收穫』と玉葉の『樂屋裏』とは又復闡秀畫家の氣を吐くべし」と目されたものの、二曲<sup>(103)</sup>一<sup>(104)</sup>双の玉葉の作品は鑑査において惜しくも落選となった。「第十回文部省美術展覧會（舞臺の裏） 栗原玉葉氏筆」と記された絵葉書（挿図16）には、衣裳を着付けてもらっている少女と着付けをする男性、それを見守る婦人が描かれており、おそらく玉葉がこのときに出品した作品の半隻であろうと考えられる。玉葉の作品はその後、本石町にあった美術店・泰文社での文展選外展で陳列され、次のように評された。<sup>(105)</sup>

栗原玉葉女史の落選畫は新聞や雑誌で騒がれてゐた丈けに眼を惹く、二枚屏風に描いたかなりの大作ではあるが、これが先年「お鶴」を描いた作者とは同一に考えることが出来ない、樂屋でいろくくと舞ひの仕度をしてゐる所が、描かれてはあるが、人形をその儘描寫したやうな感じがする。それでも賣價五百圓としてあるのは充分作者の自信を認めてやらなければならない。<sup>(106)</sup>

また、同じ広業門の院展系日本画家・石川丹麗は、次のように述べている。<sup>(106)</sup>

栗原玉葉さんの畫は、この頃少し堅くなつて來たのでは無いでせうか、一昨年あたりの行方で行つたら、多少し善い畫が描けるのでは無いかと思ひます。一體に今年文展に出品されたと言ふ畫は、コリ過ぎてゐる傾があるのです。全體にどこか人を惹き付ける優し味のある畫なのですが――

このときの落選が直接の原因かどうかは断定できないものの、これ以降、玉葉は文展などの展覧会出品作において、若い少女を題材にすることが少なくなっていた。

ところで、この年の九月に刊行された『審美』第五卷第九号に掲載された春川町男という人物による「三都女流書家論」では、作品の市場価格をもとに女性画家の格付けを行っており、野口小蘋、上村松園、池田蕉園と当時すでに定評のあった画家三名を挙げたのち、この三人に次ぐ位置にいる画家として、河崎蘭香、栗原玉葉、島成園の三人を挙げている。さらに、この三人を市場価格の順に並べれば、蘭香、成園、玉葉となるが、このうちもつとも今後が期待される画家としては玉葉を挙げ、次のように評している。<sup>(10)</sup>

此の人は技倆の點から云ふことを估く見合はせて、觀察上の態度は此の三人のうち一番緊かりしてゐる。好んで女流書家に似げなく暗黒面の描寫をもしてゐる。此の人の作品に接する時、それが眞の此の人の信念であり、態度であるならば、恚うした一方面を女流畫家中に策勵したいものである。而して此の人に望みたいのは、飽くまで明治文壇の一葉女史に於けるが如く、眞摯に自己の信念を俱象して貰ひたい。

玉葉が「暗黒面」を描いているというのは、おそらく貧しい身りの少女を描いた《さすらひ》や、無邪気なだけでない子どもの姿を描いた《幼なごち》などのことを指しているのだろう。玉葉の一部の作品には、確かにそうした傾向が見て取れる。

#### (九)

大正六年（一九一七）四月、玉葉は朝鮮へと写生旅行に出かけた。十一日に東京を出発し、翌十二日の朝には京都駅で竹久夢二に会っている。<sup>(11)</sup>朝鮮の京城では若い女性画家ということで大変な人気となり、四十枚余り持参した絵もすぐになくなっ

てしまったため、同地では毎日揮毫に忙殺され、さらには日本から描き溜めたものを取り寄せる騒ぎにまでなったという。<sup>(12)</sup>笠井彦乃へ宛てた夢二の手紙（四月二十一日付）にも、「昨日お玉さんからだよりがあつた。だいぶ忙しそうだ」と記されている。五月下旬に帰国した玉葉はそのまま京都に立ち寄り、二十八日には知人とともに保津川下りを楽しみ、夢二とともに夕食をとると、その日の夜の汽車にて東京へと戻った。<sup>(13)</sup>帰京後、玉葉は夢二へ宛てた手紙の中で、東京へ戻ってきて「うれしさよりも何だか人しれぬ物淋しさをかんじました やつぱりおばあさんになつたからでせう」ともらしたという。一方、『讀賣新聞』に掲載された記事の中では、朝鮮旅行の感想を次のように語っている。<sup>(14)</sup>

私この春朝鮮へ行つてまゐりましたが、あちらの女の人は桃色や、水色や、黄色の着物を着てゐまして、それが青い木の間隠れに見える時など、大層美しいと思ひました。しかし顔はどうしても、日本人のやうに表情がありませんですね。額を四角に剃つて居りますから、猶さう見えるのかも知れません。子供の顔は非常に可愛らしいございますよ。

このときの朝鮮旅行で得た題材をもとに、玉葉は十月の第十一回文展へ向けて朝鮮風俗を描いた作品の制作に取り掛かり、八月中頃には下絵が完成、九月十日から絹にかかったという。<sup>(15)</sup>完成作は《身のさち 心のさち》（図版1—c）と題され、江戸時代中期の女性が行燈のともる室内で団扇片手にくつろぐさまを描いた《夕べ》（挿図17）とともに文展へ出品、前者のみが入選となった。《身のさち 心のさち》（四五〇円）は対幅の作品で、その内容について、玉葉は次のように説明している。<sup>(16)</sup>

『身のさち』は京城の貴族の生活を描いたものでして、紫欄長廊に人となり物質的には何不足なくその日その日を送つてゐましても、心の底には深い憂愁の漂ふ意を表現したのです（中略）『心のさち』は嫁いでからまださほどに年かずもたゝない、しかも夫との間には愛らしい子供まで儲けた若い妻を描いたものです。楽しい家庭の爲め、愛らしい子供の爲めに何ものも犠牲にしても、少

しも悔ゆるなき女の心の豊かさ、幸福さこれが此の畫の生命になつてゐます。

挿図 17 《夕べ》大正 6 年

《身のさち 心のさち》<sup>(119)</sup>は、文展開会一日目に、秋田県鷹巣町の貴族院議員によつて売約済となつた。

(十)

明けて大正七年（一九一八）一月十三日、玉葉宅では門下生らとともに新年試筆会が開催された。<sup>(120)</sup>余興では長唄や仕舞が演じられ、石田とよ子（芳玉）、上田てつ子（壽葉）、瀬島みさ子（紅玉）、棚橋みつ子（光葉）、丸山照子（照玉）、渡邊鎮子（玉秋）にはそれぞれ新しく雅号が与えられた。『淑女畫報』第七卷第三号（大正七年二月）にはこのとき撮影された記念写真が掲載されており、そのキャプションによれば、写っている参加者は次のとおりであった。

松谷たづ子、半澤まさる、笠原貞子、渡邊鎮子、上田てつ子、棚橋みつ子、瀬島みさ子、石田とよ子、岡松了子、坂本通子、<sup>せきねなみ</sup>岡根なか子、深澤操、栗原玉葉、加藤操、櫻井あき、小宮山とし、御法川いと子、菊地千年、川内たき、西てい子、石川たかね、丸山照子、松田ふみ、水澤ふみ、黒澤なほ

挿図 18 会場内の《みだれ心》、『報知新聞』大正 7 年 3 月 7 日より

三月、玉葉は六日より十五日まで、白木屋呉服店にて開催された報知新聞社美術部主催の美術展覧会<sup>(121)</sup>へ、『みだれ心』と『お七とお染』を出品した。<sup>(122)</sup>このうち『みだれ心』については、大正七年三月七日発行の『報知新聞』に写真が掲載されており（挿図 18）、『美術畫報』第四十一編卷七（大正七年五月）に掲載された『戀のみだれ』（挿図 19）が、これに該当する作品であることが知られる。同作には笠に手をかけしどけなく座り、上目遣いに画面左上を見やる女性が描かれており、構図や持物な



どには、大正三年の再興第一回日本美術院展覧会へ出品された池田輝方（一八八三—一九二二）の《お夏》（福富太郎コレクション）との類似性が見て取れる。

この頃より玉葉の作品には、お夏や清姫など、恋に悩み苦しむ女性の姿を題材にしたものが多くなり、浪漫的な傾向を示すようになる。こうした画題の選択について、玉葉はのちに次のように語っている。<sup>(123)</sup>

畫題は始めから人物を主として、殊に子供と女に興味を覺へて來たものですが、女になりますと、現實味の多分にあるものよりも、多少非現實的でも浪漫的なものが好きです。

例へば乞食女を描きますにも、單なる乞食女では満足が出來ません爲に、『うらぶれた乞食』を描いて、乞食の環境を偲ばすやうなものを選んで居ます。

挿図 19 《戀のみだれ》『美術畫報』第 41 編卷 7（大正 7 年 5 月）より

従つて此頃描きつゝある女性だけの畫は満足出來ませんから、其女性を戲曲的に寫生したいと思つて居ますが、未だ其修業が充分ではありません。

四月には一日より七日まで、下戸塚荒井山（現新宿区西早稲田）の美術研究所にて開かれた第六回国香会展へ《春のかたみ》<sup>(124)</sup>を出品、「浮世繪的の美人畫で、流石に圓熟した筆におつとりした色の感じがある」と評された。また同月三日より二十八日まで、上野公園の竹之台陳列館にて開催された第二回天籟畫塾展覧会<sup>(125)</sup>へは、「二曲一雙の屏風に、椿の花を糸にさした可愛らしい少女達が嬉戯してゐるさま」を描いた《のどか》<sup>(126)</sup>を出品、翌五月には画博堂の七週年記念展覧会（於日本橋俱樂部、二十一日—二十三日）へ、「着物を除いては春信風の轉化」したものと評された《月》<sup>(127)</sup>を出品している。

この年の第十二回文展へは、《朝妻桜》（挿図 20）（非売品<sup>(128)</sup>）と対幅の《春さめ秋さめ》<sup>(129)</sup>を出品、《朝妻桜》が入選となった。八月二十七日付の『讀賣新聞』は、「實は未だ取掛つて居りませんから、何を畫くか自分にもわかつて居りません」という玉葉のインタビューを掲載しているが、九月十五日刊行の『美術之日本』第十卷第九号は、「既に大作を仕上げ」たと伝えている。玉葉は《朝妻桜》について、夏頃に考え、九月に入つてから絹にかかったと述べており、このときに完成したと伝えられたのは、遊女と柳風呂とを描いたという《春さめ秋さめ》<sup>(130)</sup>のことであつたと考えられる。二日後の九月十七日に刊行された『研精美術』第二一九号は、「文展出品として花魁を執筆中」と報じている。また、玉葉は下絵を当時館林にいた広業のもとへ持参し見てもらつたと語っているが、九月二十三日付の『都新聞』は、「栗原

挿図 20 《朝妻桜》大正 7 年、朝比奈文庫蔵

挿図 21 招待会における女性作家、左より大川秀薫、伊藤小坡、上村松園、荒木月畝、大下未亡人、栗原玉葉、吉岡千種、島成園、井上よし子、『婦人畫報』第 154 号（大正 7 年 12 月）より

玉葉女史は目下信州なる寺崎廣業氏の許にありて大作に従事して居る」と伝えてい  
る。《朝妻桜》は搬入締め切り間際までかかってようやく完成し、最終日である十  
月五日の午後、『春さめ秋さめ』とともに搬入された。<sup>(136)</sup>

《朝妻桜》は満開の桜の下に、首からロザリオを下げた江戸時代初期の女性が佇  
むという構図の作品で、玉葉は次のように説明している。<sup>(137)</sup>

私の扱った材料は異教を信じて小石川の切支丹屋敷に囚はれとなつた遊女朝妻  
を描いたもので朝妻が愈死罪に行はるべく引出された時刑場の櫻が未だ蕾なの  
を傷んでせめて此櫻の咲くを見たいと言つた處奉行も其心中を憫れんで刑期  
を延ばしたといふ美しい話が基となつてゐるのです

先述のとおり、玉葉は敬虔なクリスチャンであったが、『朝妻桜』のようにキリ

スト教主題を扱った作品は必ずしも多くない。一方で明治四十四年の東京勸業展覧  
会へは『観音詣』を出品しており、ほかにも弁財天の揮毫を依頼されたり、亡き母  
のために観音像を描きたいとも述べていたという。このように、クリスチャンであ  
ったことが、制作における画題選択になんらかの制限を与えていたようすは窺えな  
い。

ところで、「大阪の松本華羊さんも同じものをお描きになつたと聞き眞個ほんどうに妙な  
暗合です」と玉葉自身が述べているように、この第十二回文展へは松本華羊も同じ  
遊女朝妻を描いた作品を出品している。<sup>(140)</sup> 華羊の作品は、「入選すれば問題とならう、  
出来栄は立派なものだと謂ふ」と目されながらも、鑑査において惜しくも落選とな  
った。

《朝妻桜》による文展五度目の入選を受けて、十月十二日付の『東京朝日新聞』は、  
「小蘋逝き蕉園蘭香相次で長逝した今日では殆ど玉葉女史獨舞臺の観がある」と記  
している。また同記事によれば、当時女性画家で独立して門下生を集めていたのは  
玉葉のみであったため、蕉園や蘭香のところをいた門下生が玉葉のもとへ移り、弟  
子の数は六十人ほどになっていたという。

十月二十八日、文部大臣・中橋徳五郎（一八六一—一九三四）は文展入賞者を中心に、  
審査員や文部省当局者、新聞・雑誌記者等を招いて上野・精養軒にて午餐会を開い  
た。<sup>(141)</sup> 来場者は三〇〇人とも四〇〇人とも伝えられており、玉葉も他の女性作家等と  
ともに出席している。このとき招待された女性作家は、玉葉のほか京都の伊藤小  
坡や上村松園、大阪の吉岡千種や島成園、神田区仲猿楽町にあった大川写真館の娘  
で日本画家の大川（上野）秀薫、おなじく日本画家で荒木十畝（一八七二—一九四四）  
の門人・荒木月畝（一八七三—一九三四）、女子美術学校出身で洋画家・大野隆徳（一  
八八六—一九四五）に学んでいた井上よし子、薩摩の出身で岡田三郎助（一八六九—  
一九三九）に師事していた洋画家・有馬さとえ（一八九三—一九七八）、千葉県出身  
で朝倉文夫（一八八三—一九六四）に師事していた彫刻家・作田輝子等<sup>(142)</sup>で、新聞各  
紙や諸雑誌には、これらの女性作家らがひとつのテーブルを囲んで集まり、開会を  
待つようすを写した写真（挿図 21）が掲載されている。

また玉葉はこの頃、本郷にあった私立錦秋実科高等女学校において教鞭を執って

いたという。<sup>(146)</sup>

(十一)

大正八年（一九一九）一月十二日、玉葉宅にて新年の試筆会が催され、琴や三味線などの合奏に、門下生令嬢の踊りといった余興が行われた。<sup>(147)</sup>『淑女畫報』第八卷第三号（大正八年二月）に掲載されたこのときの記念写真（挿図22）には、次のように多くの参会者が写されている。

安西きよ子、井手たつ子、水澤ふみ子、岡松了子、江木妙子、小宮山とし子、近藤とみ子、樋口つね子、小谷野光江、山川綾子、林菊子、近藤富士子、近藤

りか子、西てい子、石川日出子、井上秀子、多川光江、牛丸稻子、加藤操子、栗原玉葉、植松照子、石井たかね、島田京子、海野清子、坊城春子、後藤けい子、足立幾代、榊原歌津子、大木譽子、美濃部俊子、石田とよ子、佐藤英子、上田てつ子、白瀬千代子、黒澤たま子、草野淑子、笠原貞子、半澤まさ江、宮崎美和子、尾崎菊子、太田利子、坂内スギノ、大和文子

また、この年のはじめ頃、寺崎広業の天籟画塾は三月に上野公園の竹之台陳列館にて展覧会を開く予定であったが、開会を目前にした二月二十一日に広業が五十二歳で亡くなった。<sup>(148)</sup>二十四日には浅草橋場総泉寺にて葬儀が執り行われ、玉葉も参列している。<sup>(149)</sup>広業が没してしばらくしてから、玉葉は妹弟子の長山はくや、京都で上村松園に師事し、明治四十四年に東京へ戻ってからは広業の門で学んでいた浅見翠蛾（松江・松篁）（一八八六？—一九六九）等と相前後して、日本画家・松岡映丘の門へと移った。<sup>(150)</sup>映丘は東京美術学校で広業に学び、この前年の第十二回文展において、特選首席となっていた。

四月、玉葉は池田輝方とともに天主教調査を目的に長崎を訪れる。<sup>(151)</sup>長崎の県立長崎図書館が所蔵する『来訪者芳名録』には、「弥生十一日」という日付とともに玉葉の名前が記されており、このとき玉葉が同館を訪れていたことが知られる。<sup>(152)</sup>

九月五日、従来の文展鑑審査における問題等から、新たに帝国美術院規程が公布され、審査委員も一新、十月十五日より帝国美術院展覧会（以下帝展）の第一回展が開催された。九月二十日発行の『美術之日本』第十一卷第九号において、「二曲一双に徳川末期の女の子の風俗繪を」<sup>(153)</sup>揮毫中であると伝えられた玉葉は、『長崎街道』と題した作品を出品するも、惜しくも落選となった。<sup>(154)</sup>『淑女畫報』第八卷第十一号（大正八年十月）には、同作とともに玉葉を写した写真（挿図23）が掲載されており、現在長崎歴史文化博物館が所蔵する『古賀街道図屏風』（挿図24）がこのときの出品作であったことが知られる。長崎街道沿いに位置する古賀の地にて、郷土人形である古賀人形を制作していた小川家の前には、現在でも「古賀の藤棚」として有名な藤棚があり、古くは街道を通行する人々の休憩所ともなっていた。この人形師と藤棚を題材に描かれたものと考えられている同作には、藤棚の下で制作途中の人形

挿図22 大正8年新年試筆会、『淑女畫報』第8卷第3号（大正8年2月）より

を並べる女性と濡れ縁に腰かけた少女が、身なりがよく、籠に腰かけ人形を抱いた少女を見やるようすが描かれている。

翌十一月六日より十日まで、下戸塚荒井山の日本美術学校にて開催された第七回国香会展<sup>(156)</sup>へは、『鶯娘』と『童貞』を出品、「栗原玉葉の諸作は場中一際目に立つ」と評された。『女學世界』第二十一巻第一号（大正九年一月）には、このときの出品作を写した写真図版が掲載されており（挿図25、26）、現在シヨファイユの幼きイエズス修道会（兵庫県宝塚市）の所蔵する『聖女』（図版2）が、このときの出品作のひとつであったことが知られる。同作にはシャガの花を前景に、両手を前で重ねてわずかにうつむき、目を閉じて静かに佇む同修道会の誓願者が描かれている。<sup>(158)</sup>一方、ともに出品された『鶯娘』には、白い衣をまもって雪の積もった傘を差す女性の姿が表されている。

十二月、この年の帝展や院展から一掃されるかたちとなった女性日本画家たちは、十五日の夜、府内某所にて会合を開き、新団体設立を決定した。<sup>(159)</sup>このとき集まったのは玉葉のほか、四月に大阪より上京して楠木清方のもとで学んでいた岡本更園や、女子美術学校出身で同じく清方門の柿内青葉、女子美術学校出身の院展系画家・野原慶子、彫刻家・石川光明の娘で、寺崎広業等に師事し、日本美術院の研究員であ

挿図23 「帝展の出品畫」『淑女畫報』第8巻第11号（大正8年10月）より

った石川丹麗、横山大観の遠戚にあたり、日本美術院の院友であった鈴木けん子、さらに松本楓湖（一八四〇—一九三三）や梶田半古（一八七〇—一九一七）に学んだ

挿図24 《古賀街道図屏風》大正8年、長崎歴史文化博物館蔵

大久保鏡湖に他二名を加えた計九名で、このことに関し、玉葉は次のように語った<sup>(160)</sup>という。

私達の最も親しい間柄で今度一つの會を組織し、毎月一回宛集合を開いて各自の研究に力めると同時に毎年一回會員の力作を出品する展覽會を開きたいと思

挿図 25 《童貞》『女學世界』第21卷第1号（大正9年1月）より

年が改まった大正九年一月十九日発行の『時事新報』では、会名が「女性の耀やきといふ意味から、月耀會と命名」された<sup>(161)</sup>と伝えられ、同月二十六日には、その結成が会則とともに玉葉の手元にて発表された。メンバーは前年の会合の際に名前の挙がっていた鈴木けん子、野原慶子、石川丹麗、大久保鏡湖のほか、長山はくと浅見翠蛾を加えた七名で、事務所は白山御殿町二一〇の玉葉宅に置かれた<sup>(162)</sup>。『現代之美術』第三卷第二号（大正九年三月）には、次のような玉葉の言葉が掲載されている<sup>(163)</sup>。

私達はどうかして女性らしい畫を描きたいと思つて居りましたが機會がなかつたので其儘になつて居りましたが今度月耀會<sup>(マヤ)</sup>を組織したのは永い間會員の胸の中に考へて居た事が期せずして合致したのでこれからは眞に女性として目醒めた製作を發表する爲め會員相互の修養を計り研究もし努力もして從來とは面目を一新したものを作る考へで居ります

なお、十二月の会合の際に名前の挙がっていた柿内青葉と岡本更園はこのとき発表されたメンバーには含まれていなかったが、更園は関西へ戻り京都で西山翠嶂（一八七九—一九五八）に師事し、玉葉と親友であったという青葉は、玉葉没後の大正十四年（一九二五）に月耀會の會員となっている<sup>(164)</sup>。

また、大正八年に制作された作品に、「大正己未玉葉」の落款を持つ《童女》（挿図27）がある。紙本に墨画淡彩でスケッチ風に描かれ、付属する桐箱には「幼き日の幸子を」と記された紙片が貼付される。他に、大正八年六月二十四日付の手紙とともに、梅香崎女学校校長の広津藤吉が所蔵していたことから、この頃の制作と考えられている作品に、《美人図》（挿図28）と《聴鶯図》（挿図29）がある<sup>(165)</sup>。前者では江戸時代中期の女性が色付いた紅葉の舞う中に佇む姿が描かれ、後者では江戸時代後期の女性が白梅の見える窓辺に座り、窓外を窺うように見やるさまが表されている。

挿図 26 第7回国香会会場風景（玉葉の《鶯娘》が一番左）、『女學世界』第21卷第1号（大正9年1月）より

## (十二)

大正九年（一九二〇）一月六日、玉葉宅では恒例の試筆会が催され、門弟の佐々間てい子、藤本ひで子、富田ます子等による長唄などの余興が行われた。<sup>(167)</sup>

三月には六日からの三日間、長崎の県立長崎図書館において、栗原玉葉女史近作画展覧会が開催された。<sup>(168)</sup> 会場には《長崎街道》《鶯娘》《童貞》《蝶々》《野の花》《ゆ

挿図 29 《聴鶯図》大正 8 年、長崎県美術館蔵

挿図 28 《美人図》大正 8 年頃、長崎県美術館蔵

挿図 27 《童女》大正 8 年、長崎県美術館蔵

く春》《桃の節句》《春さめ秋さめ》など、玉葉の作品二十余点に加え、門下生等の作品も陳列されたという。<sup>(169)</sup>

六月下旬、京橋の高島屋呉服店において、第一回月耀会展が開催された。<sup>(170)</sup> 出品総数は約三十点、玉葉は《葛の葉》《藤娘》（挿図 30）、《いちご畑》（挿図 31）、《孤児》《廓三題》を出品している。<sup>(171)</sup> 《藤娘》は大振りの藤模様を配した振袖姿の女性が藤の枝をかつぐという典型的な構図に則った作品であり、一方の《いちご畑》には、農作業姿の女性がいちごの収穫を行っているさまが描かれている。挿絵などにおいて、玉葉は早い時期から農婦を題材として取り上げているが、本画として描かれたものは珍しく、その描法についても、「玉葉さんの繪としてはちよつと描法が新しい」と評されている。また《孤児》については、「二人の孤児とそれに物教へてゐる外教の坊さんとの姿に一種の人生觀が含んで、此の會の出品中、思想の深い點に少しも觸れた唯一の例であつた。孤児の着衣を揃への棒縞にしたのが、それらしい氣

挿図 31 《いちご畑》大正 9 年

挿図 30 《藤娘》大正 9 年

分を出すに最も利いて居つた」とされ、キリスト教的な内容の作品であったことが知られる。

十月の第二回帝展へは、「天主教の尼僧が朝早く聖堂に詣る處」を描いた《朝詣

挿図 32 《戀》制作中の玉葉、『婦人畫報』第178号（大正9年11月）より

挿図 33 《お夏狂乱》大正9年、長崎歴史文化博物館蔵

で」と、「狂亂のお夏を書いた」《戀》の二点を出品するも、二点ともに落選となった。このうち《戀》に関しては、『淑女畫報』第九卷第十一号（大正九年十月）や『婦人畫報』第一七八号（大正九年十一月）に制作中のようすを写した写真（挿図32）が掲載されており、現在長崎歴史文化博物館が所蔵する《お夏狂乱》（挿図33）がこれに該当する作品であることが知られる。また、『朝詣で』に関しては、『梅光女学院同窓会誌』第十九号（昭和六十二年）に次のように記されている。<sup>(175)</sup>

帝展に出品された大作「朝詣で」は黒いベールをつけた二人の修道女が花園を横ぎり聖堂にむかう姿を描いたものである。この頃の作品には同じく修道女と孤児を描いた「孤児」もある。「朝詣で」はのち梅光女学院に寄贈され、ケネディ館の校長室に掲げられて異彩を放っていたが、第二次大戦末期の昭和二十一年七月二日の戦災で、学院の全校舎とともに焼失した。

同誌にはさらに《朝詣で》の図版（挿図34）が掲載されており、現在長崎県美術館が所蔵する《尼僧（童貞）》（挿図35）が第二回帝展出品作《朝詣で》であったことが知られる。

《尼僧（童貞）》は前年の国香会展へ出品した《聖女》と同じく、シヨファイユの幼きイエズス修道会の修道女を描いたもので、芙蓉の花を背景に、歩み行くふたりの修道女が描かれている。やや先を行く女性は手に『ローマ・ミサ典礼書』を持ち、続く女性の腰には磔刑像のついたロザリオが下げられている。

一方《お夏狂乱》には、赤く咲き乱れた曼珠沙華の中に、恍惚とした表情で座る女性の姿が描かれている。ほどけかかった帯には、たとえば近松門左衛門（二六五三―一七二五）の『五十年忌歌念仏』にある、「むかひ通るは清十郎じやないか。笠がよくにた。すげがさがよくにた笠が。笠がよくにたすげ笠が。」<sup>(176)</sup>といった一節などからの引用と思われる、「よく」「る」「に」「た」「通る」「げ笠が」という文字が駒繡風に表されている。

挿図34 『梅光女学院同窓会誌』第19号（昭和62年）掲載の《朝詣で》図版

挿図35 《尼僧（童貞）》大正9年、長崎県美術館蔵

挿図36 《西鶴のお夏》『淑女畫報』第10巻第8号（大正10年7月）より

(十三)

大正十年（一九二一）五月、月耀会に新メンバーとして大川秀薫が加わり、翌六月、京橋の高島屋呉服店にて第二回展が開催された。<sup>(179)</sup> 玉葉は「『桃園中に『子守と小供』とを描いたものである』<sup>(180)</sup>という『春』と、『二人道成寺』『西鶴のお夏』『習作』の四点を出品している。<sup>(181)</sup> このうち『西鶴のお夏』に関しては、『淑女畫報』第十巻第八号（大正十年七月）に掲載された写真図版（挿図36）から、現在長崎歴史文化博物館が所蔵する『解脱尼』（挿図37）がこれに該当する作品であることが知られる。

同作には椿の花を背にして、桶に水を汲む尼僧の姿が描かれている。井原西鶴（一六四二—一六九三）の『好色五人女』において、清十郎の死後出家したお夏は、「正覚寺に入て上人をたのみ十六の夏衣けふより墨染にして朝に谷の下水をむすびあげ夕に峯の花を手折夏中ハ毎夜手灯か、げて大経のつとめおこたらず有難びくにとハなりぬ<sup>(182)</sup>」とされ、『解脱尼』に描かれているのはこのうち、「朝に谷の下水をむすびあげ」ている場面であると推測される。

十月の第三回帝展へは五枚一組の『清姫物語』（図版3）を出品、三年ぶりの入選を果たした。同作は例年どおり搬入最終日に持ち込まれ、鑑査中には「女流の出品は空前の多数であつたけれど連日將<sup>(183)</sup>棟倒しとなつて栗原玉葉の『清姫物語』だけ獨り氣を吐いているらしい<sup>(184)</sup>」、「全委員の多数が同意して大概決るらしいのを舉れば『清姫五題』栗原玉葉<sup>(185)</sup>」などと報じられている。

五点にはそれぞれ題がつけられ、縁先で物思いにふける「想ひ」、笠をかぶって歩みゆく「女」、川辺で顔を覆ってうずくまる「執着」、髪を振り乱して炎をまとった「焰」、満開の桜に囲まれ山間に佇む多宝塔を描いた「眞如」という構成になっ



ている。

栗原玉葉女史の『清姫物語』は、小品五枚揃の女らしい整った作であったが、模倣の痕があまりに露骨にされてゐたのが物足りなかつた。五枚物の第二の『女』といふのは一昨年、國展に華岳君の出した『日高川』と殆んど同構圖であるし、第四の圖は、いつかの文展の上村松園女史の評判の作を連想させ、題まで同じ『焰』であるのが面白くない。<sup>(186)</sup>

こうした当時の帝展評ですでに指摘されているように、『清姫物語』には村上華岳（一八八八—一九三九）の『日高河清姫図』や上村松園の『焰』などを参考にしたであろう形跡が見られ、第三図の「執着」についても、その構図だけを見れば楠木清方の第十一回文展入選作『黒髪』との類似が認められる。とはいへ玉葉の『清姫物語』は、先述のとおり鑑査において好評を博し、「却々上出来だとの評判だ」と報じられ、広業門の兄弟子であった野田九浦（一八七九—一九七二）も後年、「帝展になつてから出した道成寺繪卷は非常に評判がよかつた」と記している。<sup>(187)</sup>

この第三回帝展開催中、フランスのソシエテ・ナショナル・デ・ボザール（国民美術協会）からの申し込みにより、かねてから計画が進められていた日仏交換美術展覧会の協議会が開かれ、洋画家・黒田清輝（一八六六—一九二四）を委員長に据えた出品委員会が発足、発送予定日まであまり時間もなかつたことから、「既に發表されたもの、内適當と認むるもの」を中心に出展作品が集められた。<sup>(188)</sup>十二月下旬には出品作家と作品がほぼ決定し、翌大正十一年一月、古美術品を含む作品四五〇点余りが横浜港より発送された。<sup>(189)</sup>このとき送られた作品のなかには、第三回帝展へ出品された玉葉の『清姫物語』も含まれており、四月二十日よりパリのグラン・パレにて開催されたソシエテ・ナショナル・デ・ボザールのサロン日本部に陳列された。<sup>(192)</sup>また、このときの出品作を用いて、日本学者、セルゲイ・グリゴリエヴィチ・エリセエフ（Sergei Grigorievich Eliseev 一八八九—一九七五）によりまとめられた日本美術史の概説書『La peinture contemporaine au Japon』には、「想ひ」と「眞如」の図版が掲載され、玉葉は近代におけるやまと絵の画家であり、「眞如」の風景は古い

やまと絵の様式で描かれ、水平線が慣例どおり画面の非常に高い位置に設定されていると説明されている。<sup>(193)</sup>

このように、『清姫物語』にはやまと絵の影響が見られるとされているが、玉葉はもともと、「昨年頃から浮世繪を以て頭角を顯して來た大阪の島成園女史と東京の栗原玉葉女史」というように、浮世繪系の画家と見なされていた。女子美術学校時代からの友人であった鈴木けん子はのちに、玉葉の画風変遷について次のように語っている。<sup>(195)</sup>

畫風は近來非常に變化しました。始めは浮世繪でしたが、後にはこれに版畫と倭繪の研究が加はつたやうです。繪卷物など随分一生懸命に研究してゐました。倭繪をもつと深く研究して何かやらうと思つてゐたのでせう

帝展評においてすでに、「師亡き後は、新たに現審査員で美術學校教授なる松岡映丘氏の薰陶を受けられつゝ、あると聞きましたが、果せる哉、今度の出品「清姫物語」には、著しく大和繪風の影響が見えて、氣品も相當に高いものあるを感ぜました」と見なされているように、こうした画風の変化は、大正八年に師である寺崎広業が没した後に、新たに松岡映丘の門へと移つたことによるものと考えられる。

大正十年十一月には、一日より七日まで、三越呉服店にて開催された『婦人世界』主催の第二回女流日本画展覧会へ『秋草』<sup>(197)</sup>を出品、同展には七日間で約六万人が訪れたといひ、一三〇円の値がつけられた玉葉の作品は売約済となつた。<sup>(198)</sup>

同月には二十四日より二十八日まで、高島屋呉服店にて現代作家新作画展が開かれ、玉葉は『日高川』<sup>(200)</sup>を出品している。

挿図 38 《美人画》大正 10 年、長崎県美術館蔵

また、長崎県美術館が所蔵する《美人画》(挿図38)は、賛に「一九二二、八月三十一日」とあることから、この年に制作されたものと考えられている作品である。同作には笠をかぶって片袖脱ぎに小袖を着し、紙の結び付けられた枝を担ぐ女性が、左からの側面観で描かれている。

挿図39 《葛の葉》大正11年、長崎県美術館蔵

なお、大正十年十月十二日付の『國民新聞』は玉葉について、「女史は三十を四ツ五ツ越した年増盛りを獨りであた所此の頃帝大を出たホヤ／＼の新法學士で年も女史より餘程若い好男子と結婚し折々銀ブラなどの御兩人の姿を眺めて羨望する女子美術の女學生等の岡焼話に花を咲かせてゐた」と伝えているが、玉葉と親しくしていた林源吉は後年、同記事に対する記述かどうか断定はできないものの、次のように述べている。

一頃玉葉女史結婚のニュースが新聞に載せられたことがあつたがこれはデマであつた。噂のぬしからは取敢へず釋明の書簡が達した。意志強固の女史は畫道精進に生涯を捧げ遂に獨身で世を了つた。

(十四)

大正十一年(一九二二)初め、玉葉の自宅では例年どおり新年会が開催された。<sup>(203)</sup>三月には十日より開催された平和記念東京博覧会へ《葛の葉》(挿図39)を出品、入選となり、審査において褒状を受賞した。<sup>(204)</sup>《葛の葉》は歌舞伎や人形浄瑠璃の演目「蘆屋道満大内鑑」などで知られる葛の葉の話を題材としたもので、萩と藤袴を

背景に、葛模様の小袖を片袖脱ぎに着て笠をかぶり、杖を手にした女性が顧みるようにして足元の鳴子を見やるさまが描かれている。葛の葉の話のなかでも古いもののひとつである、古浄瑠璃「しのだづまつりぎつね付清明出生」の前半部分は、摂州安部の郡司の息子・安倍保名が信太の森で狩人から救った狐が葛の葉と名乗る女性となつて保名のもとに現れ、後に安部晴明となる子を産むものの、正体が露見したことから、「恋しくば尋ね来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」という一首をのこして森へ帰っていくというあらすじで、森に帰る葛の葉のようすが次のように語られている。<sup>(205)</sup>

比しも今は、秋なれば、ちくさにすたく、むしの聲、かれ／＼に成そつらき、うきことのはに秋風の、そよ／＼そよと、ふく時は、わさだおくてに、立はりし、ひかでなるこのおとたく、それかと」(十才)

みれば、おしねもる、かゞしの姿みゆるをも、もしかり人や有らんと心ほそざはかぎりなし、よう／＼たとり行程に、我すむりも、近付ぬ

ここでは田んぼに張られた鳴子が風に鳴り、案山子の姿も狩人に見えて心細く感じている葛の葉のようすが語られている。玉葉の《葛の葉》もこうした場面を描いたものと考えられるだろう。

また、同作に描かれた葛の葉の帯には、「恋」「みよ」「る」と葛の葉が森へ帰る際に書き残した歌の文字が駒繡風に表されている。<sup>(206)</sup>

四月、玉葉は月耀会のメンバーとともに京阪への写生旅行を計画していたが、同行者に差支えが生じたために延期、そのまま中止になったという。<sup>(207)</sup>

翌五月二十五日、玉葉の成功を祝福し、お茶の水女子高等師範学校内の桜蔭会において、玉葉の母校、梅香崎女学校の後身である梅光女学院の東京同窓会が開催された。会には上京中であつた広津藤吉をはじめ同窓生三十一名が出席、玉葉には祝辞とともに花束が贈られたという。

六月には二十二日より二十六日まで、京橋の高島屋呉服店にて第三回月耀会展が開催、玉葉は《お夏》《乙女二題》《花合せ》、四点の《似顔習作》を出品する。<sup>(208)</sup>《お

夏》では赤い曼珠沙華の花を背景に、狂気の表情を浮かべたお夏を描き、《乙女二題》では喜びと憂いを表現した<sup>(20)</sup>。また、《花合せ》は「二曲半双に、古風な宮媛の草花合せの優雅な遊びを画いたもの<sup>(21)</sup>」で、四点の《似顔習作》は、「常盤津文字金」に扮する河村菊江（一八九〇—一九七二）（挿図40）、「村の娘」に扮する森律子（一八九〇—一九六二）（挿図41）、「歌ふ楊貴妃」に扮する村田嘉久子、「遊女朝妻」に扮する初瀬浪子（一八八八—一九五二）をそれぞれ描いたものであった<sup>(22)</sup>。菊江らが所属する帝国劇場では、大正七年五月一日より、劇作家・岡本綺堂（一八七二—一九三九）が脚本を手がけた「新鏡山」が上演され、常磐津の師匠・文字金を菊江が演じ<sup>(23)</sup>（挿図42）、大正十年七月十六日からは、浪子が朝妻役を務めたおなじく綺堂作の「切支丹屋敷」が上演されている<sup>(24)</sup>。また、同年十月二十六日からは嘉久子が楊貴

挿図41 《似顔習作「村の娘 律子」》大正11年

挿図40 《似顔習作「常盤津文字金 菊枝」》大正11年

妃を演じた「玄宗と楊貴妃」が、翌大正十一年二月一日からは律子が田舎の娘役を務めた「一日の素盞鳴尊」がそれぞれ上演されている<sup>(25)</sup>（挿図43）。玉葉は嘉久子や律子ら帝国劇場の女優とも交遊があったことから、四点の《似顔習作》は、これらの公演をもとに制作されたものと考えられるだろう。玉葉の描く「菊枝」は、やや密度が異なるものの、「新鏡山」の文字金と同じく黒襟に格子模様の着物を着ており、「律子」では髪型から服装に至るまで、「一日の素盞鳴尊」における娘姿がほぼそのまま写し取られている。

これより前の六月二十日、玉葉は二日後に迫った月耀会への出品作《花合せ》を仕上げ、翌二十一日、リニューマチを発症、いくばくもなく心臓病を併発した。二十

挿図42 「新鏡山」より、菊江扮する常磐津の師匠文字金、『演藝畫報』第5年第6号（大正7年6月）より

挿図43 「一日の素盞鳴尊」より、律子扮する田舎の娘、『演藝畫報』第9年第3号（大正11年3月）より

六日には病をおして月耀会の会場を訪れ、テキパキと指示を出していたという。二十九日には、松岡映丘の門人たちによって結成された新興大和絵会の第二回展（於三越呉服店）を見学している。

七月に入り一時小康を得るが、再び容体が悪化、八月二十一日慶応大学病院へ入院した。病院では大谷博士の治療を受けるも、腎臓を病み、九月八日には急性肺炎を発症<sup>(218)</sup>、午後十時頃、看護人に紙と筆を乞い、「天國へ」の三文字を認め、翌九日午前三時三十分、「モウ眠ルヨ」のひとことを最期に玉葉は息を引き取った。享年四十。しばしば猫と一緒に写った写真が新聞等に掲載されているように、無類の猫好きでもあった玉葉は、病院においても愛猫のことを気にかけていた<sup>(219)</sup>。また、当時東北地方へ旅行中だった竹久夢二は、玉葉の訃報に接し、日記に次のように認めている<sup>(220)</sup>。

旅に玉葉の死をきく。

玉葉が秋に先ちゆきぬてふ風のとよりをみちのくにきく

君死すと風はたよりをもたらしぬ山川遠きみちのくににして

告別式は十二日の午後三時より、本郷教会にて執り行われた<sup>(221)</sup>。式には遺族や門弟、月耀会のメンバーの他に、正木直彦（二八六二—一九四〇）や鏑木清方、松岡映丘らが参列した<sup>(222)</sup>。十一月九日には故郷である長崎県山田村の有明館にて告別式が行われ、十二日には谷中の斎場にて分骨埋葬式が行われた<sup>(223)</sup>。玉葉の遺骨は谷中の天王寺と山田村、それぞれに埋葬された。このうち玉葉の絶筆「天國へ」の文字が刻され、天王寺の「甲種甲第十三號一側」<sup>(224)</sup>にあったという東京側の墓地は、昭和の後半に無縁墓として処理された<sup>(225)</sup>とい、現在はのこっていない。

銀葉会と称した玉葉の弟子たちは、玉葉の没後、年長の者は他の門へ移り、若い者には最古参であった石田芳玉が指導にあたった<sup>(226)</sup>。玉葉の門には、すでに名前を挙げたほかに、松尾萬都子<sup>(227)</sup>、西森緑葉<sup>(228)</sup>、浅野てつ、富田ますみ<sup>(229)</sup>、渡辺てい子<sup>(230)</sup>、副島富子等<sup>(231)</sup>がいたという。

大正十三年の九月には、長崎の県立長崎図書館にて、玉葉女史遺作展覧会が開

催された<sup>(232)</sup>。同展について、林源吉は次のように記している<sup>(233)</sup>。

大正十三年九月二十一日から二十三日迄三日間長崎縣立圖書館にて玉葉女史遺作展を開催した。遺作展へ素描を多く出陳したことはかなり大膽な試みであった。一般の觀衆が如何に素描を理解されるや、また斯様な試みは故人に對し禮を失しはせぬかといふ不安もあつた。然るにこの計畫は總て運好く成果を收めた。第三室に掲げた故人の肖像に對し脱帽敬意を表せらるゝ觀衆多く中日の午後長崎の有志にて美術鑑賞家として知られてをる橋本辰二郎氏が粗末な椅子に腰を下して寫生帳のページを熱心に繰つてをられたのや故人の恩人であるミス・カウチ先生を會場に迎へたことなど主催者にとつて確に愉快であつた。

玉葉が亡くなった後、白山御殿町の家には生前から同居していた姪のとし子が住んでいたというが、昭和二十年（一九四五）の東京空襲で焼失、ここにあつた遺作や遺品はすべて失われてしまったともいう。

おわりに

玉葉門下のひとりであり、玉葉とおなじく本郷教会の会員でもあつた半澤満佐枝は、師の没後、次のように語っている<sup>(234)</sup>。

「先生はやさ<sup>(235)</sup> かつた」私は永久に忘れ得ぬでせう。先生は私達が繪を一生懸命に勉強した日は喜ばしうに見えましたそして色々な便宜をあたへて下さつた。先生はなまけるといふ事はお嫌ひらしい。私達が何時お伺ひしても先生はきつと繪筆をもつておいでゝした。こうしてたえず御研究をつゞけて居られる先生の藝術に捧げつくされた御心を私はいつも尊く拜して居ました努力そのもの、やうな先生の御熱心さは私達門下生に常に強い衝動と敬虔な心とお與へ下さつたのです、無雜作に髪を後につかねて御簾の前で大勢のお弟子の下繪をなほして居られた先生の御様子は私達に最も親しみ深いお姿でした

玉葉門、およびその門下生らの具体的な活動については今後の課題としたいが、たとえば大正九年より『婦人世界』の主催で行われた女流日本画展覧会では、半澤満佐枝のほか、石田芳玉や安西きよ子らが入選を果たしている。<sup>(236)</sup>一方、玉葉自身は次のようにも語っている。<sup>(237)</sup>

此頃は御嫁入前の方で修業なさるのが殖えたやうですね、種々な紹介を経て見えますので遂お断りも出来ません。繪の趣味が段々家庭へ入つた爲めでもありませうが、繪の嗜みがおあんなさる方は、家庭の整理も美術的に、然うして色物のお好もお上手になれるやうです。夫にお姿の作りも上品になると言ふことです。<sup>(237)</sup>

このように、玉葉門にはあくまでお稽古事として絵を学びに来ていた者も多くいたようである。『淑女畫報』にはしばしば、玉葉宅で行われた試筆会やかるた会、門下生らのようすなどが写真入りで掲載されており、人気の程が窺われる。<sup>(238)</sup>

ところで、大正五年九月刊行の『審美』第五卷第九号によれば、当時全国に女性画家は「六百何十人」おり、三都だけでも「三百何十人」を数えたという。<sup>(239)</sup>こうした女性画家の台頭が見られた理由のひとつとして考えられるのが、玉葉の画塾のように、女性が容易に絵を学ぶことのできる環境がととのいはじめていたということである。東京では玉葉以前にも池田蕉園や河崎蘭香が多くの弟子を抱え、また女性を対象とした美術教育機関である女子美術学校が、明治三十四年四月に開校していた。こうした女性画家の増加により、その活動の様相も次第に変化していった。

蕉園や蘭香の世代では、いまだ女性画家の数が少なく、ほかの男性画家に交じって個々に活動していたが、その次の世代になると、たとえば蕉園に学んだ吉岡千種や松本華羊が、大阪へ移って大正五年に鳥成園、岡本更園らとともに女四人の会として展覧会を開いたように、女性画家同士が集まり、団体として活動をするようになる。

東京では女子美術学校卒業後の研究会のような位置づけで、同校にて日本美術史などを教授していた紀淑雄（一八七二—一九三六）等により国香会の女子部が組織

され、明治四十年には第一回展を開催、以後も活動を続けた。一方女性が主体となって組織された団体としては、大正七年に女性洋画家の団体である朱葉会が創立され、大正九年には女性日本画家の団体・月耀会が結成される。さらに翌大正十年には、朱葉会、月耀会に対抗して、洋画家・玉置照信（一八七九—一九五七）の妻で、女子美術学校出身の玉置茂登子と荻野千代子を中心に、水野年方（一八六六—一九〇八）の妻であった日本画家の水野秀方（一八七五—一九四四）や、洋画家・椎塚修房の妻で、水野年方に師事した日本画家の椎塚蕉華、哲学者・井上哲次郎（一八五六一—一九四四）の娘で洋画家の吉田雪子等が集まり、日本画・洋画合同の和光社が結成された。<sup>(240)</sup>このように、東京では大正半ば頃から、女性画家による団体活動が非常に活発になっていく。

玉葉は蕉園や蘭香等と同じように、他の男性画家に交じって学び、文展や広業塾の展覧会等へ出品していた。一方、女子美術学校時代から鈴木けん子と親しくし、また国香会の研究会では他の女性画家等とともに作品の互評などをしていたという。<sup>(241)</sup>こうした経験に加え、玉葉は広い交友関係をもっていた。

女性画家だけに限ってみても、清方門下の柿内青葉とは親友だったといい、笠井彦乃の広業塾入門に際して手を貸し、大正四年に大阪を訪れた折には、鳥成園と岡本更園に会ったという。<sup>(242)</sup>また、後に洋画家となった深沢紅子（一九〇三—一九九三）が女子美術学校へ入学する際には、その才能を認めた玉葉の推薦があったといい、さらに大正七年、自身が『朝妻桜』で入選を果たした第十二回文展の招待日に、玉葉は大川秀薫を連れて会場を訪れている。<sup>(243)</sup>秀薫はこの年二十二歳。女学校在学中から跡見玉枝（一八五九—一九四三）に学び、その後池上秀畝（一八七四—一九四四）の門へ移った。大正六年の文展では落選となるが、翌年の第十二回展へ出品した花鳥画『冬近し』で初入選を果たしている。<sup>(245)</sup>このように、秀薫と玉葉の間には一見なんの接点も見出せない。このことから、玉葉の交友範囲の広さが窺い知れるだろう。

結成が玉葉の手元で発表されたことや、事務所が玉葉宅に置かれたことなどから、玉葉は月耀会における中心的な存在であったと考えられるが、それはこうした玉葉の性格に依るところも大きかったのではないだろうか。

以上のように、明治後半から大正期における女性画家の活動を俯瞰的に見たとき、玉葉は蕉園や蘭香の世代とその次の世代とをつなぐような位置におり、女性日本画家における個から団体へという流れを先導する役割を果たした画家であったといえるだろう。

本稿ではあくまで栗原玉葉ひとり目的を絞って記してきたが、その先に広がる女性画家たちのネットワークを、ほんの一端とはいえ垣間見ることができたように思う。玉葉を含め、近代に活躍した女性画家個々の活動に関する研究はもちろん、今後は彼女たちのより具体的な交流のようすや、制作における影響関係などについても考察を深めていきたい。

## 註

- (1) 小川治作「洋書日本書閣秀作家評話」(『審美』第九卷第二号、審美書會、大正九年二月) 二十二頁。
- (2) 石川宰三郎「閨秀畫家の現在と將來」(『女學世界』第二十一卷第十二号、博文館、大正十年十二月) 八十二頁。
- (3) 伊東深水「風俗畫について―新文展の作例二三―」(『塔影』第十二卷第十一号、塔影社、昭和十一年十一月) 五十九頁参照。
- (4) 「栗原玉葉さん門下の銀葉會はそのまま、續ける」(『讀賣新聞』、大正十一年九月十九日) 四面、および「噫栗原玉葉女史」(『審美』第十一卷第十号、審美書會、大正十一年十月) 三十六頁参照。
- (5) 女性画家に関する総合的な研究としては、『奔る女たち 女性画家の戦前・戦後 1930-1950年代』展』図録(栃木県立美術館、平成十三年十月)や草薙奈津子監修『日本の美術 女性画家の全貌。―疾走する美のアスリートたち』(美術年鑑社、平成十五年十二月)、研究代表者池田忍『科学研究費研究成果報告書 近代日本の女性美術家と女性像に関する研究』(平成十九年三月)などがある。また大阪の女性画家に関する研究に、小川知子編『島成園と浪華の女性画家』(東方出版、平成十八年三月)がある。
- (6) 吉良智子「1920、30年代の日本における女性美術家グループの活動と展開」(『鹿島美術研究』年報第二十二号別冊、鹿島美術財団、平成十七年十一月)。
- (7) 玉葉について記された文献には他に、左記のものがある。
  - 「長崎縣女人国記 花の群像 長崎の巻(89) 栗原玉葉 女流美人画家の第一人者」
  - 「長崎日日新聞」、昭和三十一年三月三十日
  - 『梅光女学院五十年史』(梅光女学院、昭和三十八年六月)
  - 「女のふるさと 51 吾妻出身の栗原玉葉」(『長崎新聞』、昭和四十五年十二月二十五日)
  - 「長崎女人伝」下(西日本新聞社、昭和五十五年九月)
  - 『女子美術大学八十年史』(女子美術大学、昭和五十五年十月)
  - 栗原千鶴「梅光百年史の人々(十三) 栗原玉葉女史」(『梅光女学院同窓会誌』第十九号、梅光女学院同窓会、昭和六十二年六月)
  - 長崎女性史研究会編・著『長崎の女たち』(長崎文献社、平成三年六月)
  - 阿野露団「長崎の肖像―長崎派の美術家列伝―」(形文社、平成七年十二月)
  - 竹中正夫「美と真実 近代日本の美術とキリスト教」(新教出版社、平成十八年七月)
  - 石橋義孝・石橋久美子「栗原玉葉」(『孫文・梅屋庄吉と明治大正長崎事情I』、長崎伝習所、平成二十四年三月)
  - 永松親子「大正時代の女流日本画家―栗原玉葉―」(『ながさきの空』第二十七集、十八銀行、平成二十八年二月)
- また、玉葉に関する先行研究としては、北川久「松本華羊作『殉教(伴天連お春)』の位相」(『島成園と浪華の女性画家』、前掲註5)、五味俊晶「栗原玉葉の印章について」(『長崎歴史文化博物館研究紀要』第十号、長崎歴史文化博物館、平成二十八年三月)がある。
- (8) 五味俊晶氏が指摘されているように(『栗原玉葉の印章について』(前掲註7)一〇六頁参照)、玉葉は大正六年十一月刊行の『繪畫清談』第五卷十一月号において、自ら朝鮮の平城の生まれだと述べているが、他の文献では、「わたくしは生れは九州で」(『千圓の懸賞當選者定まる』(『三越』第三卷第三号、三越呉服店、大正二年三月)二十一頁)、「妾は自分が夢と詩に親しみの多い、長崎の地に生れた」(『帝國繪畫寶典 本文之部』(帝國繪畫協會、大正七年七月)二二二頁)などと述べている。なお、栗原家は文久二年頃、近隣の寺の火災で焼けたという(『山田村史』(山田村役場、昭和二十九年三月)一五六頁参照)。
- (9) 栗原玉葉「繪ができ上つた時の嬉しさ」(『婦人世界』第九卷第四号、實業之日本社、大正三年三月) 四十三頁参照。
- (10) 「梅香崎女学校卒業式」(『東洋日の出新聞』、明治三十九年三月二十九日)、および黒木五郎「梅光女学院史」(『下關梅光女学院』、昭和九年六月) 一八九頁参照。
- (11) 栗原玉葉「畫家としての経験と理想」(『婦女界』第十一卷第五号、婦女界社、大

- 正四年五月) 三十四頁参照。
- (12) 栗原玉葉「繪筆を友として……」(『婦人世界』第十五卷第十号、實業之日本社、大正九年十月) 四十五頁。
- (13) 鈴木けん子「友を憶ふ」(『新人』第二十三卷第十号、新人社、大正十一年十月) 七十頁。
- (14) 前掲註11。
- (15) みをつくし「廣業門下の閨秀畫家」(『女學世界』第十七卷第十号、博文館、大正六年九月) 一三一頁、および「嗚呼河崎蘭香女史」(『審美』第七卷第四号、審美畫會、大正七年四月) 四十一頁参照。
- (16) 前掲註11、三十四—三十五頁参照。
- (17) 栗原玉葉「繪師の苦と樂」(『婦人世界』第十三卷第二号、實業之日本社、大正七年二月) 六十四頁参照。
- (18) 「本郷教會記事」(『新人』第九卷第一号、新人社、明治四十一年一月) 七十一頁参照。
- (19) 前掲註17、六十二頁。
- (20) 鈴木衡平「栗原綾子様の靈へ」(『新人』第二十三卷第十号、前掲註13) 六十六頁。
- (21) 『女子美術大学百年史』(女子美術大学、平成十五年三月) 三十二—三十五頁参照。
- (22) 「女子美術學校卒業式」(『東京日日新聞』、明治四十二年四月二日) 三面参照。
- (23) 「第七回繪畫展覽會報告」(『研精畫誌』第三十八号、美術研精會事務所、明治四十二年八月) 四頁参照。なお、同展の会場は上野公園・竹之台陳列館。会期は六月四日より三十日(同上)、ないしは六月二日より三十日(『研精會展覽會』(『美術新報』第八卷第七号、畫報社、明治四十二年六月) 五頁参照)。
- (24) 「創立十週年紀念大展覽會趣旨」(『研精畫誌』第四十二号、美術研精會事務所、明治四十三年三月) 二頁、および「出品目録」(『研精畫誌』第四十三号、美術研精會事務所、明治四十三年六月) 七頁参照。
- (25) 「異畫會褒賞授與式」(『美術新報』第十卷第六号、畫報社、明治四十四年四月) 三十一頁参照。
- (26) 「第十一回繪畫展覽會受賞席次及び受賞品目録」(『美術之日本』第三卷第三号、審美書院、明治四十四年三月) 十五頁参照。
- (27) 前掲註26。
- (28) 前掲註25。
- (29) 「勸業展覽會式」(『美術新報』第十卷第六号、前掲註25) 三十一頁参照。
- (30) 「東京勸業展覽會」(『美術之日本』第三卷第三号、前掲註26) 二十六頁参照。
- (31) 「美術界」(『東京朝日新聞』、明治四十四年二月十三日) 八面参照。
- (32) 「出品目録」(『研精畫誌』第四十九号、美術研精會事務所、明治四十四年五月) 三頁参照。
- (33) 前掲註32。
- (34) 夕咲「研精會の印象」(『讀賣新聞』、明治四十四年四月十五日) 五面。
- (35) 「審査報告」(『研精畫誌』第四十九号、前掲註32) 十一—十二頁参照。
- (36) 『日本美術年鑑』明治四十四年(一九一一年)(国書刊行会、平成八年八月) 七十九—八十頁参照。なお、国香会については、沓沢耕介「紀淑雄の美術家養成活動」(『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第五号、早稲田大学會津八一記念博物館、平成十六年三月) に詳しい。
- (37) 「異畫會展覽會の出品」(『美術之日本』第四卷第四号、審美書院、明治四十五年四月) 二十六頁参照。
- (38) 「第拾貳回異畫會展覽會作品集」(便利堂、明治四十五年五月) 参照。
- (39) 前掲註38。
- (40) 「千圓の懸賞當選者定まる」(前掲註8) 十八—二十三頁。以下、同懸賞募集の募集内容、當選者についても、同資料を参照した。
- (41) 「表紙に掲げたる『千兩額』」(『三越』第一卷第二号、三越吳服店、明治四十四年四月) 八—九頁参照。
- (42) 駿河町人「當選者諸君と語るの記」(『三越』第三卷第三号、前掲註8) 二十三—二十六頁参照。
- (43) 「第二回懸賞廣告畫陳列」(『三越』第三卷第三号、前掲註8) 三十四頁、および「第二回懸賞廣告畫陳列」(『三越』第三卷第四号、三越吳服店、大正二年四月) 十四—十五頁参照。
- (44) 「千圓の懸賞當選者定まる」(前掲註8) 二十一頁。
- (45) 「諸展覽會日割」(『美術新報』第十二卷第五号、畫報社、大正二年三月) 三十一頁参照。
- (46) 「第十三回異畫會展覽會受賞者人名」(『研精美術』第七十三号、美術研精會、大正二年四月) 二十八頁参照。
- (47) 会場は上野公園・竹之台陳列館。四月二日午後三時より会員等の内覧があり、翌三日より一般公開。三十日まで開かれた(『研精會第十二回繪畫展覽會報告』(『研精美術』第七十三号、前掲註46) 三十三頁、および「美術研精會第十二回繪畫展覽會」(『美術新報』第十二卷第七号、畫報社、大正二年五月) 三十一頁参照)。
- (48) 「研精會第十二回繪畫展覽會報告」(前掲註47) 三十八頁参照。なお、『美術新報』第十二卷第七号では、玉葉の出品作を「子供」としている(三十一頁)。

- (49) 「廣告畫圖案懸賞募集」(『大阪印刷界』第四十一号、大阪印刷界社、大正二年三月) 四十三頁。
- (50) 「日本精版印刷會社懸賞廣告畫決定」(『美術新報』第十二卷第十号、畫報社、大正二年八月) 四十七頁參照。
- (51) 「懸賞廣告畫當撰發表」(『大阪印刷界』第四十五号、大阪印刷界社、大正二年七月) 三十八頁參照。なお、玉葉の作品は、化粧品會社・桃谷順天堂に買い上げられたものと見られている(田島奈都子「近代日本美術界におけるポスターという存在」(『近代画説』第二十二号、明治美術学会、平成二十五年十二月) 六十八頁參照)。
- (52) 「秋田の廣業展覽會」(『繪畫清談』第七号、繪畫清談社、大正二年八月) 七十二頁參照。なお、会期は七月二十一日より二十五日まで(同上)、ないしは七月二十日より二十四日まで(『秋田市に於ける天頼畫塾の展覽會』(『研精美術』第七十七号、美術研精會、大正二年八月) 三十五頁參照)。
- (53) 「秋田市に於ける天頼畫塾の展覽會」(前掲註52) 三十七頁參照。
- (54) 「文展出品畫賣約濟及價格」(『美術週報』第一卷第三号、美術週報社、大正二年十月二十六日) 四頁參照。
- (55) 前掲註54。
- (56) 前掲註9、四十三―四十四頁。
- (57) 一記者「閩秀畫壇の花形玉葉女史」(『淑女畫報』第八卷第四号、博文館、大正八年三月) 五十四―五十五頁。
- (58) 「美術」(『東京朝日新聞』、大正二年十一月二十六日) 七面參照。
- (59) 「國香會の作品」(『東京朝日新聞』、大正二年十一月三十日) 七面參照。
- (60) 前掲註9、四十五頁。
- (61) 「大正博覽會日本畫出品目錄」(『研精美術』第八十六号、美術研精會、大正三年五月) 五十頁參照。
- (62) 「閩秀畫家 今秋の作品(二)」(『讀賣新聞』、大正三年十月三日) 五面參照。
- (63) 『帝國繪畫寶典 本文之部』(前掲註8) 二二二頁。
- (64) 前掲註62、五面。
- (65) 「第八回文展の陳列品目錄」(『繪畫清談』第二卷第十号、繪畫清談社、大正三年十一月) 四頁參照。
- (66) 前掲註65、三頁參照。
- (67) 「文展初日」(『東京朝日新聞』、大正三年十月十七日) 五面、および「京都文展繁昌」(『東京朝日新聞』、大正三年十一月二十七日) 五面參照。
- (68) 「藝術」(『東京朝日新聞』、大正三年十二月十二日) 六面參照。
- (69) 鳥有山人「鳥瞰圖」(『日本美術』第十七卷第三号、日本美術社、大正四年一月) 六十一頁參照。また同記事によれば、このとき並べられた作品の大部分は、子供を描いたものであったという。『美術正論』第三卷第一号(大正四年一月)の「個人消息」では玉葉について、「小供畫會を催す由」(三十七頁)と伝えられており、あるいはこのときの陳列會のことを指しているのだとも考えられるが、現在のところ確証は得られていない。なお、同様の消息は、「個人消息」(『美術週報』第二卷第十五号、美術週報社、大正四年一月十七日)、および「個人消息」(『多都美』第九卷第二号、異畫會本部、大正四年二月)においても伝えられている。
- (70) 「個人消息」(『美術正論』第三卷第二号、美術正論社、大正四年三月) 三十八頁、および栗原千鶴「梅光百年史の人々」(十三) 栗原玉葉女史」(前掲註7) 一一一頁參照。
- (71) 前掲註11、三十六―三十七頁。
- (72) 「個人消息」(前掲註70)。なお、大正四年九月十七日付の『讀賣新聞』によれば、以前玉葉が住んでいた家には鈴木けん子が暮らしていたという。
- (73) 「本年最初の展覽會」(『讀賣新聞』、大正四年二月六日) 四面參照。
- (74) 「女子美術大学百年史」(前掲註21) 三十八頁參照。
- (75) 「巴奈馬太平洋萬國博覽會參同事務報告」下卷(農商務省、大正六年三月) 三二五頁。
- (76) 前掲註74、および「二女學校の榮譽」(『讀賣新聞』、大正三年八月五日) 五面參照。なお、『讀賣新聞』の記事によれば、このときの選抜は、東京府知事によるものであったという。
- (77) 「教育經濟館本邦出品陳列圖」(前掲註75) 參照。
- (78) 前掲註74。
- (79) 「姉妹の如き二人畫家」(『讀賣新聞』、大正四年九月十七日) 四面參照。
- (80) 会期終了日については、おおむね十五日とされているが、「國香會展覽會」(『繪畫清談』第三卷第六号、繪畫清談社、大正四年六月) 四十四頁等)、『美術之日本』第七卷第六号(大正四年六月)では、「十日まで」(十五頁)とされている。
- (81) 「國香會繪畫展覽」(『讀賣新聞』、大正四年五月八日) 四面參照。
- (82) 「國香會展覽會」(前掲註80)。
- (83) 一記者「五月の諸展覽會」(『美術之日本』第七卷第六号、審美書院、大正四年六月) 十五頁。
- (84) 「開花樓畫會」(『美術正論』第三卷第四号、美術正論社、大正四年七月) 三十二頁參照。
- (85) 「女子美術の教鞭を執る」(『讀賣新聞』、大正四年六月十五日) 四面參照。
- (86) 「女子美術大学八十年史」(前掲註7) 六十九頁參照。



- (87) 「新婚の玉葉女史が久方の筆の冴え」(『國民新聞』、大正十年十月十二日) 三面参照。  
 なお、柿内青葉に関しては、福寄美和子「(柿内青葉) に関する調査報告(上)」(『女子美術大学芸術学科紀要』第一号、女子美術大学芸術学部芸術学科、平成十二年九月)、福寄美和子「(柿内青葉) に関する調査報告(下)」(『女子美術大学芸術学科紀要』第二号、女子美術大学芸術学部芸術学科、平成十四年三月) に詳しい。
- (88) 「文展出品三千七百餘」(『東京日日新聞』、大正四年十月八日) 七面参照。なお、『いにし春』については、掲載物によって作品名が異なり、他にも「繩暖簾」(前掲註79)、「去にし春」(『婦人畫報』第一一五号、東京社、大正四年十一月)、「行く春」(一記者「栗原玉葉女史と一時間」(『日本美術』第一九二号、日本美術社、大正五年一月) 四十一―四十一頁) などと記されている。
- (89) 「三澤九阜」満を持して美術季節を待つ」(『繪畫清談』第三卷第九号、繪畫清談社、大正四年九月) 四十三―四十四頁。
- (90) たとえば、前掲註79や「閨秀畫家の收穫」(『讀賣新聞』、大正四年十月七日) 四面などにおいて、制作のようすが伝えられている。
- (91) 「文展出品三千七百餘」(前掲註88)。
- (92) 「第九回文部省美術展覽會第一部陳列の光景」(『美術週報』第三卷第七号、美術週報社、大正四年十月三十一日) 三頁参照。
- (93) 「第九回美術展覽會陳列品目録」(『美術新報』第十五卷第一号、畫報社、大正四年十一月) 五十二頁参照。
- (94) 『繪本筋書』(帝國劇場、大正四年七月二日) 参照。
- (95) 一記者「栗原玉葉女史と一時間」(前掲註88) 四十頁。
- (96) 「特別附録第十六回異畫會展覽會出陳畫全集」および「第十六回美術展覽會」(『多都美』第十一卷第一号、異畫會本部、大正六年一月) 参照。
- (97) 会期については、五月十一日より六月四日とするもの(「よみうり抄」(『讀賣新聞』、大正五年五月六日) 七面等)のほか、開始を八日とするもの(『天籟塾第一回展覽會』(『審美』第五卷第六号、審美畫會、大正五年六月) 四十一頁等)や、終了を六月六日までとするもの(『天籟塾展覽會』(『都新聞』、大正五年五月二十一日) 一面) など相違が見られる。
- (98) 「天籟塾第一回展覽會圖録」(畫報社、大正五年五月) 参照。
- (99) 一記者「天籟塾展覽會」(『美術之日本』第八卷第五号、審美書院、大正五年五月) 十六頁。
- (100) みをつくし「廣業門下の閨秀畫家」(前掲註15) 一三三頁参照。
- (101) 長田幹雄氏の編集による「竹久夢二年譜」によれば、玉葉と夢二が初めて顔を合わせたのは大正五年七月四日のことであったという(『夢二日記4』(筑摩書房、昭和六十二年十一月) 三八六頁参照)。
- (102) 栗原玉葉「畫趣は子供から」(『婦人世界』第十一卷第十一号、實業之日本社、大正五年十月) 一〇七―一〇八頁。
- (103) 「文展花がた」(『國民新聞』、大正五年十月一日) 四面。
- (104) 「文展出品豫報」(『中央美術』第二卷第十号、日本美術學院、大正五年十月) 一〇七頁参照。
- (105) 「文展選外展覽會」(『美術週報』第四卷第九号、七面社、大正五年十一月五日) 七頁。
- (106) 石川丹麗「本年の展覽會」(『美術週報』第四卷第十五号、七面社、大正五年十二月十七日) 七頁。
- (107) 春川町男「三都女流畫家論」(『審美』第五卷第九号、審美畫會、大正五年九月) 二十三頁。
- (108) 「夢二日記2」(筑摩書房、昭和六十二年七月) 一二四―一二五頁参照。
- (109) 前掲註108、一二五頁参照。
- (110) XYZ「藝苑異聞」(『審美』第六卷第六号、審美畫會、大正六年六月) 四十一―四十一頁参照。
- (111) 『夢二書簡1』(夢寺書坊、平成三年二月) 二七九頁。
- (112) 前掲註108、一六〇―一六三頁、および『夢二書簡1』(前掲註111) 二八六―二八七頁参照。
- (113) 前掲註108、一七二頁。
- (114) 「簾越しに見ゆる涼しの姫は 繪の集ひ」(『讀賣新聞』、大正六年七月三十一日) 四面。
- (115) 「文展便り(其二)」(『美術之日本』第九卷第八号、審美書院、大正六年八月) 二十七頁参照。
- (116) 「日本畫六點だけ入選發表さる」(『都新聞』、大正六年十月十三日) 五面参照。
- (117) 「文展入選作品總目録」(『繪畫清談』第五卷十一月号、繪畫清談社、大正六年十一月) 八十六頁参照。
- (118) 栗原玉葉「身のさち」と「心のさち」(『繪畫清談』第五卷十一月号、前掲註117) 五十一頁。
- (119) 「文展日誌(二)」(『美術旬報』第五卷第三号、七面社、大正六年十月二十九日) 五頁参照。なお、このとき『身のさち 心のさち』を売却された方のご遺族のお話では、作品は昭和二十五年にあった町の大火の際に焼けてしまった可能性が高いという。

- (120) 「玉葉女史門下の試筆會」(『淑女畫報』第七卷第三号、博文館、大正七年二月) 参照。  
以下同試筆會に関する内容はすべて同記事を参照した。
- (121) 「報知新聞社美術部主催美術展覧會」(『白木「タイムス」』第十五卷第三号、白木屋呉服店、大正七年三月) 三十一頁参照。
- (122) 「報知新聞社主催美術展覧會」(『研精美術』第一二五号、美術研精會、大正七年五月) 二十七頁参照。
- (123) 栗原玉葉「浪漫的な畫題を」(『藝苑』第一編第九号、帝國美術社、大正九年二月) 二十九頁。
- (124) 「國香會第六回展覧會」(『美術旬報』第六卷第九号、七面社、大正七年四月九日) 三頁参照。
- (125) 「美術研究所の展覧會」(『讀賣新聞』、大正七年四月六日) 七面。
- (126) 「天籟畫塾展覧會」(『美術旬報』第六卷第九号、前掲註124) 四頁参照。なお、二日は招待日であった。
- (127) 一記者「第二回天籟畫塾展覧會」(『審美』第七卷第五号、審美畫會、大正七年五月) 四十三頁。
- (128) 「畫博堂記念展覧會」(『讀賣新聞』、大正七年五月二十三日) 七面参照。
- (129) 「第十二回文部省美術展覧會陳列品目錄」(『美術新報』第一卷第二号、東西美術出版社、大正七年十月) 四十四頁参照。
- (130) 「宿屋まで流浪の朝顔」(『讀賣新聞』、大正七年八月二十七日) 四面。
- (131) 一記者「文展出品作家の努力」(『美術之日本』第十卷第九号、審美書院、大正七年九月) 二十八頁。
- (132) 「日本畫發表本日」(『讀賣新聞』、大正七年十月十一日) 五面参照。
- (133) 「文展出品の減少」(『國民新聞』、大正七年十月七日) 五面参照。
- (134) 「個人消息」(『研精美術』第一二九号、美術研精會、大正七年九月) 四十八頁参照。
- (135) 前掲註132。
- (136) 「文展の開會迫る」(『都新聞』、大正七年九月二十三日) 五面。
- (137) 《朝妻桜》の完成日については、十月十一日付の『東京日日新聞』が、「五日後漸と仕上がりました」(七面) という玉葉の言葉を伝えているのに対し、同日発行の『時事新報』は、「出品の前日にやつと描き上げました」(九面) と語る玉葉の談話を掲載している。
- (138) 「文展メ切の日」(『東京日日新聞』、大正七年十月六日) 七面参照。
- (139) 「合格確定の日本畫」(『東京日日新聞』、大正七年十月十一日) 七面。
- (140) 県立長崎図書館が所蔵する植木元太郎資料のなかには、植木が玉葉へ宛てた書簡の下書きと思しき資料がある(整理番号四〇六一九四)。同資料には、「拝啓過日御願上置候小生羽織辨財天の画之御揮毫被成下候哉乍失敬以出中御尋申上候」と記されている。
- (141) 「文展日本畫の鑑査が速い 玉手箱の明く時は」(『中央新聞』、大正七年十月十一日) 三面。
- (142) 華羊の出品作については、大正七年十月三日発行の『時事新報』や、『淑女畫報』第七卷第十一号(大正七年十月) に写真図版が掲載されており、小川知子氏や北川久氏が指摘されているように(小川知子「近代大阪における女性画家の研究―島成園と『女四人の会』の画家を中心に―」(『鹿島美術研究』年報第二十号別冊、鹿島美術財団、平成十五年十一月)、北川久「松本華羊作『殉教(伴天連お春)』の位相」(前掲註7)、現在福富太郎コレクションとなっている『殉教(伴天連お春)』がこれに該当する作品であることが知られる。
- (143) 「文展の噂」(『中央新聞』、大正七年十月五日) 三面。
- (144) 「美術家招待 新文相の快舉」(『讀賣新聞』、大正七年十月二十九日) 五面、および「當代藝術家の花を集めた文相の招待會」(『時事新報』大正七年十月二十八日付夕刊、大正七年十月二十九日) 六面等参照。
- (145) 「松園女史を圍んで」(『東京日日新聞』、大正七年十月二十九日) 七面、および一記者「文相の美術家招待會」(『美術之日本』第十卷第十一号、審美書院、大正七年十一月) 十八頁等参照。
- (146) 「昨日入選した日本畫」(『都新聞』、大正七年十月十一日) 五面参照。
- (147) 「玉葉女史邸の試筆會」(『淑女畫報』第八卷第三号、博文館、大正八年二月) 参照。以下同試筆會に関する内容はすべて同記事を参照した。
- (148) 「天籟畫會」(『審美』第八卷第二号、審美畫會、大正八年二月) 二十二頁参照。
- (149) 「故人に生寫の喪主に関秀門下生等の歩みも悲く」(『讀賣新聞』、大正八年二月二十五日) 五面参照。
- (150) 野田九浦「河崎蘭香と栗原玉葉」(『塔影』第十二卷第三号、塔影社、昭和十一年三月) 四十一頁参照。
- (151) 「玉葉女史來崎」(『東洋日の出新聞』、大正八年四月三日) 参照。
- (152) 『來訪者芳名録』には「弥生十一日」と記されているが、玉葉以前の頁にはすでに「大正八年四月八日」の記載があり、玉葉の記した「弥生」とは旧暦のことであると考えられている(長崎県立長崎図書館ホームページ [http://www.lib.pref.nagasaki.jp/libary/name\\_all.html](http://www.lib.pref.nagasaki.jp/libary/name_all.html) 参照。最終アクセス日:平成二十八年十一月十三日)。
- (153) 一記者「帝展と諸作家」(『美術之日本』第十一卷第九号、審美書院、大正八年九月)

十八頁。

- (154) 「大作が殺到した帝展昨日の締切」〔東京日日新聞、大正八年十月六日〕七面参照。
- (155) 『新長崎市史』第二卷近世編（長崎市、平成二十四年三月）三五八頁、および五味俊品「栗原玉葉の印章について」（前掲註7）九十八頁参照。
- (156) 「國香會繪畫展覽會」〔新興美術〕第三卷第十一号、新興美術社、大正八年十一月五十八頁。
- (157) 「國香會展覽會」〔審美〕第八卷第十二号、審美畫會、大正八年十二月）五十五頁。
- (158) 《聖女》に描かれた女性や花については、ショファイユの幼キイエズス修道会の相川ノブ子氏よりご教示いただいた。なお、《聖女》という作品名は、表袴裏の墨書による。
- (159) 「婦人畫家の新團體」〔美術之日本〕第十一卷第十二号、審美書院、大正八年十二月三十頁参照。なお、第一回帝展には、女性画家として唯一、荒木十畝門下の上原桃畝が入選を果たしている。
- (160) 「女流日本畫の新團體生る」〔審美〕第九卷第一号、審美畫會、大正九年一月六十一頁。
- (161) 「團體消息」〔藝苑〕第一編第九号、前掲註123）四十八頁参照。
- (162) 「女流日本畫家の團體月耀會」〔美術畫報〕第四十三編卷五、畫報社、大正九年三月十四頁参照。
- (163) 「女流畫家の月耀會」〔現代之美術〕第三卷第二号、現代之美術社、大正九年三月六十二頁参照。
- (164) 石川幸三郎「帝展の閨秀作家評判記」〔淑女畫報〕第十卷第十二号、博文館、大正十年十一月）十二頁参照。
- (165) 「新會員二人を加へてきよう月耀會展」〔讀賣新聞〕、大正十四年一月二十日）七面参照。
- (166) 『長崎県美術館年報』第三号（長崎ミュージアム振興財団、平成二十二年三月）七十三頁、および長崎県美術館ホームページ参照（最終アクセス日：平成二十八年十一月十三日）。
- (167) 「事件と人（二）」〔淑女畫報〕第九卷第三号、博文館、大正九年二月）参照。
- (168) 「玉葉女史展覽會」〔東洋日の出新聞〕、大正九年三月五日）参照。出品作品についても同記事を参照。なお、同記事には出品作のひとつとして、永見徳太郎所蔵の《朝妻船》が挙げられているが、永見は《朝妻校》の旧蔵者として知られていることから、これは《朝妻校》の間違いだと考えられる。
- (169) 「玉葉女史展覽會」〔東洋日の出新聞〕、大正九年二月二十四日）参照。

- (170) 会期は多く二十一日から二十五日まで（「展覽會」〔美術月報〕第一卷第十一号、美術月報社、大正九年七月）十六頁等参照）とされているが、一部二十七日までとするものも見られる（「月耀會展觀」〔中央美術〕第六卷第八号、日本美術學院、大正九年八月）一三二頁等参照）。
- (171) 一記者「初夏の諸展覽會」〔美術之日本〕第十二卷第七号、審美書院、大正九年七月二十一—二十二頁参照。
- (172) 「月耀會第一回展覽」〔美術畫報〕第四十三編卷十、畫報社、大正九年八月）九頁。
- (173) 前掲註172。
- (174) 「帝展の締切」〔都新聞〕、大正九年十月八日）七面参照。ただし、同紙ではキリスト教の尼僧を描いた作品を《朝參》と記載しているが、十月六日付の『東京日日新聞』では《朝詣で》とされており（「帝展」、七面）、本稿ではそちらに従った。
- (175) 栗原千鶴「梅光百年史の人々（十三）栗原玉葉女史」（前掲註7）四頁。
- (176) 伊藤晴子「栗原玉葉 尼僧（童貞）」〔長崎県美術館名品図録〕、長崎県美術館、平成二十四年三月）一〇四頁参照。
- (177) 「近松全集」第四卷（岩波書店、昭和六十一年三月）六三四頁。また、同様の一節は、井原西鶴の『好色五人女』などにも登場する。
- (178) 「月耀會の新會員」〔讀賣新聞〕、大正十年五月十一日）四面参照。
- (179) 会期については、大方十八日から二十二日まで（「展覽會」〔美術月報〕第二卷第十三号、美術月報社、大正十年七月）十六頁等参照）とされているが、一部十九日からとするものも見られる（「月耀會展覽會」〔繪畫清談〕第九卷七月号、東京美術館、大正十年七月）二十四頁参照）。
- (180) 梅澤和軒「女流作家の悩み」〔審美〕第十卷七月号、審美畫會、大正十年七月）十九頁。
- (181) 「月耀會展覽會」〔美術公論〕第二卷第五号、美術公論社、大正十年八月）四十九頁参照。
- (182) 井原西鶴「好色五人女」卷一（森田庄太郎板、貞享三年）十七丁裏—十八丁表。
- (183) 「帝展メ切る」〔國民新聞〕、大正十年十月六日）三面参照。
- (184) 「鑑査終了に近づき有望な日本畫」〔國民新聞〕、大正十年十月十日）三面。
- (185) 「けふ決定する入選の日本畫」〔國民新聞〕、大正十年十月十一日）四面。
- (186) 城北山人「帝展一瞥の印象」〔美術之日本〕第十三卷第十号、審美書院、大正十年十月）十七頁。
- (187) 「新婚の玉葉女史が久方の筆の冴え」（前掲註87）三面。
- (188) 前掲註150。

- (189) 「佛國サロン出品協議會」(『美術月報』第三卷第三号、美術月報社、大正十年十二月) 十四頁参照。
- (190) 「日佛交換展」(『美術月報』第三卷第四号、美術月報社、大正十年十二月) 十五頁参照。
- (191) 「サロンに出る品々」「出品三島丸で出帆」(『美術之日本』第十四卷第一号、審美書院、大正十一年一月) 三十二―三十三頁参照。なお、ほとんどの資料が発送日を一月十日としているが、『美術月報』第三卷第五号(大正十一年一月)では、「一月十四日」(日佛交換展覽會)、十五頁)とされている。
- (192) 「佛國サロンの日本部」(『美術月報』第三卷第八号、美術月報社、大正十一年五月) 一頁、正宗得三郎「サロンと日佛交換展覽會」(『美術之日本』第十四卷第七号、審美書院、大正十一年七月) 二十二頁、および『西歷一九二二年サロン出品日本美術品圖録』(芸艸堂、大正十一年十月) 参照。
- (193) Elisséev, Serge. *La Peinture contemporaine au Japon*, Paris, 1923, pp. 96-97 参照。
- (194) 「文展評判の女畫家」(『東京日日新聞』、大正四年十月六日) 七面。
- (195) 鈴木けん子「逝きし栗原玉葉女史の面影」(『婦人世界』第十七卷第十一号、實業之日本社、大正十一年十一月) 一三九頁。
- (196) 前掲註164。
- (197) 一記者「婦人世界の主催で女流日本畫第二回展覽會」(『婦人世界』第十六卷第十二号、實業之日本社、大正十年十二月) 五十六―五十八頁参照。
- (198) 「婦人世界主催第二回女流日本畫展覽會の盛況」(『婦人世界』第十七卷第一号、實業之日本社、大正十一年一月) 一八九頁参照。
- (199) 「時報」(『美術畫報』第四十五編卷二、畫報社、大正十年十二月) 十六頁参照。
- (200) 「現代名家新作展」(『東京朝日新聞』、大正十年十一月二十六日) 六面参照。
- (201) 前掲註187。
- (202) 双樹園「三畫人追想」(『長崎談叢』第十八輯、藤木博英社、昭和十一年八月) 五十二―五十三頁。
- (203) 「玉葉女史門下の花形」(『淑女畫報』第十一卷第三号、博文館、大正十一年二月) 参照。なお、新年会の開催日は不明。
- (204) 「平和博美術部入賞」(『美術之日本』第十四卷第四号、審美書院、大正十一年四月) 三十三頁参照。
- (205) 『古淨瑠璃正本集』第四(角川書店、昭和四十年一月) 三七二頁。
- (206) 伊藤晴子「栗原玉葉 葛の葉」(『長崎県美術館名品圖録』、前掲註176) 一〇二頁参照。
- (207) 『五分間演説の秘訣』(春江堂、昭和十年三月) 一五九頁、および前掲註202、五十一―五十一頁参照。
- (208) 一記者「展覽會記」(『美術之日本』第十四卷第七号、前掲註192) 二十一―二十一頁参照。
- (209) 一記者「月耀會第三回繪畫展覽會」(『繪畫清談』第十卷七月号、東京美術館、大正十一年七月) 二十一頁参照。
- (210) 編輯子「小展覽會瞥見」(『美術畫報』第四十五編卷十、畫報社、大正十一年八月) 十頁参照。
- (211) 前掲註210、九頁。
- (212) 「玉葉さんの女優の似顔が評判」(『讀賣新聞』、大正十一年六月二十三日) 四面参照。
- (213) 「繪本筋書」(帝國劇場、大正七年五月一日) 参照。
- (214) 「繪本筋書」(帝國劇場、大正十年七月十六日) 参照。
- (215) 「帝國劇場 文藝座劇」(『東京朝日新聞』、大正十年十月二十四日) 四面、および秋田雨雀「玄宗と揚貴妃」を見て」(『演藝畫報』第八年第十二号、演藝俱樂部、大正十年十二月) 十六―十九頁参照。
- (216) 「繪本筋書」(帝國劇場、大正十一年二月一日) 参照。
- (217) 「廣業門下の才媛栗原玉葉女史逝く」(『東京日日新聞』、大正十一年九月十日) 九面、および「噫栗原玉葉女史」(前掲註4) 三十六頁参照。
- (218) 「噫栗原玉葉女史」(前掲註4) 三十六頁参照。
- (219) 「廣業門下の才媛栗原玉葉女史逝く」(前掲註217)。
- (220) 「夢日記3」(筑摩書房、昭和六十二年九月) 八十二頁。
- (221) 「玉葉女史の遺骨を分て」(『都新聞』、大正十一年九月十三日) 十二面、および「栗原玉葉女史逝く」(『美術畫報』第四十五編卷十一、畫報社、大正十一年九月) 十六頁参照。
- (222) 「玉葉女史の遺骨を分て」(前掲註221) 十一面参照。
- (223) 「栗原玉葉女史の分骨式を」(『讀賣新聞』、大正十一年十一月十三日) 四面参照。
- (224) 藤浪和子「東京掃苔録」(東京名墓顯彰會、昭和十五年五月) 一三四頁参照。
- (225) 「長崎女人伝」下(前掲註7) 二〇一頁参照。
- (226) 「栗原玉葉さん門下の銀葉會はそのまま、續ける」(前掲註4) 四面参照。
- (227) 「名残りの文」(『東京朝日新聞』、大正五年十月四日) 五面参照。
- (228) 「葉末の露が玉と散る栗原玉葉さんの死」(『讀賣新聞』、大正十一年九月十日) 五面参照。
- (229) 有富虎之助「栗原綾子略歴」(『新人』第二十三卷第十号、前掲註13) 六十二頁参照。
- (230) 「かるた會と書初」(『淑女畫報』第九卷第一号、博文館、大正八年十二月) 参照。
- (231) 『女子美術大学八十年史』(前掲註7) 四四〇頁参照。

(232) 「玉葉女史遺作展覧會」(『東洋日出新聞』、大正十三年九月二十三日) 参照。会期は二十一日から二十三日まで。

(233) 前掲註202、五十三頁。

(234) 『弓町本郷教会百年史』(日本基督教団弓町本郷教会、昭和六十一年十月) 四二六頁参照。

(235) 半澤滿佐枝「故玉葉先生をしのびて」(『新人』第二十三卷第十号、前掲註13) 七十一―七十二頁。

(236) 一記者「婦人世界主催の女流日本畫展覽會」(『婦人世界』第十五卷第十二号、實業之日本社、大正九年十二月) 三十四頁、および前掲註197、五十八頁参照。

(237) 前掲註57、五十三頁。

(238) 『淑女畫報』に掲載された玉葉門関係の記事は、本文中で見た試筆会のほか、「かるた會と書初」(前掲註230)、「事件と人(二)」(前掲註167)、「撮影ぶり」(第十卷第十二号、大正十年十一月)、「繪筆もちて」(第十一卷第四号、大正十一年三月)がある。

(239) 前掲註107、二十二頁参照。

(240) 「朱葉會と月曜會に對抗して日本畫洋畫合同の團秀の新團體」(『讀賣新聞』、大正十年八月二十二日) 四面参照。同会は同年十月一日より十日まで、京橋の星製菓にて第一回展を開催、日本画や洋画のほか、彫刻や写真まで陳列され、「その出來榮の點も、一寸素人離れのしたのもあれば、或はまるで始めて描いたやうな畫もあつて、亦まことに雜多と云はねばならぬ」と評されている(淳「和光社(第一回)」(『中央美術』第七卷第十一号、日本美術學院、大正十年十一月)二〇四頁)。また、同会は大正十一年十一月、同十五年一月にも展覧會を開催している(和光社展覧會はけふから京橋星製菓樓上で」(『讀賣新聞』、大正十一年十一月五日) 四面、および「搬入早いもの勝ち」(『讀賣新聞』、大正十四年十二月二十四日) 七面参照)。

(241) 「初對面の玉葉女史」(『日本美術』第十七卷第三号、前掲註69) 三十一頁参照。

(242) 小川知子「島成園と浪華の女性画家たち」(『島成園と浪華の女性画家』、前掲註5) 九頁参照。

(243) 「繪画と信仰に生きた画家 栗原玉葉(中) みことばを心の楯に」(『長崎新聞』、平成十九年十二月二日) 十三面参照。

(244) 「文展招待日の會場で美術館設立の問答」(『大阪毎日新聞』、大正七年十月十五日) 十一面参照。

(245) 大川秀薫に関しては、「文展を彩る花形(七) 関秀畫家として稀に見る美人Ⅱ 秀薫女史」(『中央新聞』大正七年十月十六日付夕刊、大正七年十月十七日) 三面を主に参照した。

(246) 石川幸三郎「関秀畫家の現在と將來」(前掲註2) においても、「この頃女史が首脳となつて組織しつゝ、ある月曜會」(『月曜會には、玉葉女史を中心に』(八十二頁) といった記述が見受けられる。

#### 凡例

文献等からの引用における漢字表記に関しては、原則原典の表記に従つたが、一部の漢字については字体を改めて表記した。また、傍点類はすべて省略した。

#### 付記

本稿は、公益財団法人 出光文化福祉財団による平成二十六年年度調査・研究助成の成果の一部をまとめたものである。

#### 付記二

本稿の執筆におきましては、多くの方々にご高配を賜りました。玉葉や玉葉作品の調査では、ショファイユの幼きイエズス修道会の相川ノブ子氏、山口大学の菊屋吉生氏、長崎歴史文化博物館の五味俊品氏、岐阜県美術館の芝涼香氏、国際浮世絵学会常任理事・行動美術協会会員の中右瑛氏、長崎県美術館の野中明氏、岐阜県美術館の松岡未紗氏、有会社アートシステムの南市雄氏、同南由紀子氏、女子美術大学歴史資料室の梁丞延氏に大変お世話になりました。また、長崎県文化観光国際部文化振興課文化施設振興班の伊藤晴子氏、実践女子大学の児島薫氏、五味俊品氏、佐倉市立美術館の山本由梨氏には、玉葉や女性画家などに関し、多くのご助言をいただきました。なかでも五味氏には長崎における玉葉のようすや、現存作品の情報など、多くのご教示をいただきました。末筆ながらここに記して、厚く御礼申し上げます。

(たどころ たい・文化財情報資料部アソシエイトフェロー)

#### 図版典拠

図版1 (a)「東京大正博覽會出品」繪葉書(美術工藝會)

図版1 (b)「第八回文部省美術展覽會出品」繪葉書(美術工藝會)

図版1 (c)「第十一回文部省美術展覽會出品」繪葉書(美術工藝會)

#### 図版2 筆者撮影

図版3 「帝國美術院第三回美術展覽會出品」繪葉書(美術工藝會)、「第三回帝國美術院展覽會出品」繪葉書(美術繪葉書出版協會) および『西歷一九二二年サロン出品

- 日本美術品圖録（芸艸堂、大正十一年十月）
- 挿図3 『美術之日本』第三卷第三号（審美書院、明治四十四年三月）
- 挿図4 『第拾貳回異画會展覽會作品集』（便利堂、明治四十五年五月）
- 挿図5 『美術新報』第十二卷第六号（畫報社、大正二年四月）
- 挿図6 『第拾三回異画會展覽會作品集』
- 挿図8 『大阪印刷界』第四十五号（大阪印刷界社、大正二年七月）
- 挿図9 『文部省第七回美術展覽會圖録』（審美書院、大正二年十一月）
- 挿図10 『文部省第八回美術展覽會圖録』（審美書院、大正三年十一月）
- 挿図11 『文部省第九回美術展覽會圖録』（審美書院、大正四年十一月）
- 挿図14、20、24、27、29、33、35、37、39 筆者撮影
- 挿図15 『天籟畫塾第一回展覽會圖録』（畫報社、大正五年五月）
- 挿図17 『淑女畫報』第六卷第十一号（博文館、大正六年十月）
- 挿図30 『淑女畫報』第九卷第八号（博文館、大正九年七月）
- 挿図31 『美術畫報』第四十三編卷十（畫報社、大正九年八月）
- 挿図40、41 『美術畫報』第四十五編卷十（畫報社、大正十一年八月）

図版要項

- 一 (a) 栗原玉葉《お約束》全図 (カラー)
- (b) 同《噂のぬし》全図
- (c) 同《身のさち 心のさち》全図
- 右三点、所在不明につき寸法および材質、所蔵者不詳
- 二 栗原玉葉《聖女》全図 (カラー)
- 絹本着色 一幅 縦一四三・九cm 横四九・二cm 宝塚 ショファイユの幼きイエズス修道会蔵
- 三 栗原玉葉《清姫物語》(a) 想ひ、(b) 女、(c) 執着、(d) 焰、(e) 眞如 (眞如を除きカラー)
- 右五点、所在不明につき寸法および材質、所蔵者不詳
- 一―三 田所泰「栗原玉葉に関する基礎研究」参照
- 図版はいずれもオフセット印刷